
ウイングブレイカー

健康に生きる尾床

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウイングブレイカー

【Nコード】

N0219R

【作者名】

健康に生きる尾床

【あらすじ】

世界の支配権を巡り争うヒトと天使。ヒトの天使の血を受け継ぎし〈異種〉と呼ばれる存在。血塗れの翼を持つ天使に全てを奪われた異種の少女『リンデ・エスカレーネ』。彼女は異種の中で最も恐れられた〈翼喰らい〉の能力者、それは天使の翼を喰らうことで強大な力を得ていくものだった。彼女は故郷を、両親を奪った〈黄昏の翼〉と呼ばれる天使に殺すために天使の翼を貪っていく…。愛と復讐のダークファンタジー、ここに開幕。

審判，そして…（前書き）

はじめまして，健康に生きる尾床です。初めての連載小説です。これは作者の妄想と自己満足，ご都合主義によるもので文章初心者の駄文です。それでも良ければ，どうぞご覧になって下さい。

審判，そして…

時は20××年，人類は戦争を繰り返し，星を荒廃させ，数多の絶滅種を出していた。

生態系が崩壊し，もはや星は緩慢なる滅びをまつのみだった。

そして，ついに人類が生み出した大量殺戮兵器により，星が滅びようとしたときであった…。

『モハヤ人にコノ世界ヲ委ネテオケヌ』

天より玲瓏なる声が世界に響き渡っていく…。

死の灰により閉ざされた空から一条の光が差し，翼有る者が降り立っていく。

神々しき白き翼を纏い，神の命により麗しき姿を世界に晒していく。

それは〈天使〉とよばれる存在。

それは〈執行者〉とよばれる存在。

『裁キヲ受ケヨ、愚カナル種』

『世界ハ我等ノモノトナル…』

人類にとって〈天使〉とは自らを滅ぼす悪魔の如く存在だった。

天から地に降り立つ〈天使〉は〈エーテル〉と呼ばれる超常的な力により次々とヒトを狩り始めていく。

〈エーテル〉は〈天使〉の呼応により、森羅万象全てを操り、時には敵を切り刻む剣となり、時にはいかなる刃をも通さぬ盾となり、神の力を振るっていくのだった。

〈天使〉の神がかった力の前では人類が幾千の歳月をかけて築き上げた文明もまた無意味なものであった。

人類が支配していた世界は〈天使〉によって斯くも空しく蹂躪されていくのだった。

そして、〈天使〉は全人類の7割を死滅させ、〈絶対統制〉により管理される存在と成り下がる。

すなわちヒトは天使の家畜となった。

天使の玩具となって捌り殺されるモノもいれば、娯楽で殺し合いをさせられるモノもいれば、サンプルとして生きたまま解剖させられるモノもいた。

かつて世界の支配者だった人類は斯くも惨めな責めを負うことになる。

これは天の裁きだと打ち拉がれる者がいた。

これが神が定めた運命だと諦める者がいた。

しかし……。

再び世界を人類の下へと取り戻そうと叫ぶ者がいた…。

「この星は俺たちのものだ！」

「トリなんぞの家畜なんて真っ平だ！」

「我等が生きる天地を取り戻そうぞ！」

ついに人類は天使に牙を向けた。

これが〈第一次聖戦〉が始まりだった。

人類は叡智の限りを尽くし、科学の力を持って、エーテルを駆使する強大な天使兵に立ち向かっていった。

そして、幾多もの犠牲を払い、ついには、天使兵を捕虜にすること

に成功するのだった。

直ちに天使の生態を研究し、天使の持つ未知なる力へ「エーテル」を解析していくのだった。

エーテルの力によって殺された兵士と天使の解剖により、天使の血肉そのものがエーテルの成分であることを発見するのだった。

人類は天使の血肉を鉄とともに溶かし、エーテルの力が宿った兵器「エンジェリウム」を生み出していき、さらに血肉を兵士の身体に移植し、人体強化させ、エーテルを扱う力を持たせる兵士をも生み出していった。

これを機に人類軍の反撃は始まっていく。

破竹の勢いで天使兵を殲滅させ、家畜となっていた同志を解放していく。

一方、天使軍は自らよりも遙かに劣る生物であるヒトのまさかの反撃に戸惑い、成す術も無く蹂躪されていった。

単純に強大な力を振るえば狩れるはずのヒトが天使兵に匹敵する力を持ち、尚かつ戦術と戦略を駆使していく状況に対応しきれないのだった。

瞬く間に人類軍の勢力圏が拡大していき、天使軍に対し優位の戦況に持っていくのだった。

しかし、人類軍は知らなかった。

天使軍が本気でないことに…。

天使には、下級天使、中級天使、そして、上級天使による階級で構成されていた。

今まで人類軍に投入していた天使兵はいわば下級天使、雑兵に過ぎなかったのだ。

人類軍の想定外の猛威に天使軍最高統治機関〈大天使法院〉は人類を危険レベル1からレベル2へと繰り上げ、中級天使を投入、さらに上級天使を司令官として派遣することを決定するのだった。

「劣種如キガ…」

「我等神ノ御使イニ逆ラウ身ノ程知ラズヨ！」

「天ノ裁キニテ悔イルガヨイゾ！」

この機に人類軍は再び劣勢に追い遣られる。

天使の力を得た人類といえど、所詮は借り物の力。

戦闘力でいえば、辛うじて下級天使に及ぶ程度。

その上位たる中級天使の戦闘力の前に成す術も無かった。

さらには上級天使等の指揮による戦略、戦術により人類軍は翻弄さ

れていくのだった。

そして、勢力圏は天使軍に再び取られていき、人類軍は敗退を余儀なくされていった。

人類は改めて天使軍の強大さを思い知ることになった。

こうして、〈第一次聖戦〉は天使軍の勝利でもって幕を閉じた。

人類は再び天使の管理下に置かれるのだった…。

――――
――――

天使の管理下に置かれた人類はゲリラ的に天使に抵抗しながらも天使という存在と関わることになる。

そして、高い知性と力を誇る天使にも人と同じ心があることを知ることになった。

これが後の〈第二次聖戦〉の遠因となっていく…。

天使の中でも気まぐれに人と交流を取る者がいた。

異性であれば、契りを結ぶこともあった。

天使とヒトの間で産まれた存在しないはずの子供〈異種〉。

彼らは天使が行使するエーテルの他に固有能力を持っていた。

その力は身体を炎と化す者、欠損した四肢を再生させる治癒能力、物質を別の物質に変換させる錬金術等の異能があった。

特に恐るべきは他者のエーテルを吸収して自らの力に変換する能力である。

この力により、中級天使、さらには上級天使に匹敵する戦闘力を持つ〈異種〉が出てくるのだった。

それに目をつけたのが当時の人類軍首脳だった。

彼らは異種を徴兵し、対天使用切り札の特殊部隊を編成していった。

さらに長きに渡る人類との交流により、天使軍の中で人類の擁護派と排除派と二つの派閥に分かれ、熾烈な政戦を繰り広げていた。

そして、擁護派は天使軍から離反し、人類軍の味方となったのだ。

擁護派のほとんどはヒトと契りを結んでいたことが要因だった。

これには大天使法院は激怒し、再度天使軍を差し向けるのだった。

〈第二次聖戦〉の始まりとなる。

〈異種〉の特殊部隊と擁護派の天使軍を味方につけた人類軍は第一次聖戦とは比較にならないほどの戦力を誇っていた。

大天使法院は人類軍に対する危険度レベル2からレベル3に繰り上げ、上級天使をも総動員させ、戦果を拡大化させていく。

戦争の最中、両軍には英雄と呼べる存在が出現する。

天使軍には最高司令官にして智将の上級天使と前線指揮官であり猛将の上級天使で構成される〈双翼〉。

人類軍には異種特殊部隊〈神殺し〉隊長・副隊長の双子と擁護派筆頭上級天使で構成される〈三聖者〉。

英雄率いる両軍の戦いは苛烈に極まり、多大なる犠牲を支払うこととなった。

決着が着かないまま膠着状態となっていた。

しかし、大天使法院よりもさらに上位、すなわち天使軍の頂点に立つ神なる存在〈ロード〉はこの事態を打破するべく、密かに特殊部隊を編成しつつ機会を伺っていたのだった。

そして、物語の舞台は異種の里〈ミッドガルド〉に移る。

ミッドガルドに住む異種の少女ヘリンデ・エスカレーネ。

彼女こそがやがて世界の行く末を左右する鍵となり、逃れられない残酷な運命に立ち向かうこととなる。

リンデとアデル

異種の里へミッドガルドへ。

カン！カン！カン！

ある広場で何かがぶつかり合うような乾いた音が響く。

それは一人の少女と一人の少年の木刀がぶつかり合う音。

少女は必死に木刀を振るい、少年はそれを涼しげに受け流していた。

「どうしたんだ？もう息が上がってるぞ」

「くそっ！当たれよ！この…うわああっ！」

少年は大降りに振るってくる少女の剣を身体を僅かに反らすだけで避け、同時に足を僅かに出して、少女のふらつく足をかけたのだった。

少女は見事に転倒し、べたーん！と音がするかのように顔面から地面に転倒するのだった。

「うぷっ！ぺっ！この野郎！少しは手加減しろよ！」

目鼻立ちが整い、肩まで掛かった銀髪、雪のように白いうなじからして、十人がみたら十人とも少女が絶世の美少女と呼ぶ容姿である。

だが、土まみれになった顔、男の様な口調から育ち盛りなやんちゃな少年のように見えた。

「おいおい、戦場じゃあ誰も手加減なんかしねえぞ。それにその男口調を直せよ。見た目が良いのに、台無しにしてるぞ、全く誰に似たんだが……」

少年は腰にまでかかる艶やかな金髪、少女と同じように雪のような白い肌、端正な顔立ちをしていた。

女性の服を着せたら、十人がいたら十人とも美少女と答えるだろうほど美しい容姿だった。

少年は木刀で肩をとんと叩きながらため息をつく。

「一寸の間違えなく〈アデル〉の精だよ！ボクをこんな風にしたのは！責任を取ってよ！」

少女は生意気な少年のように頬を膨らまし、ぶーぶーと文句を垂れてくる。

全く責任転嫁も甚だしいものである。

「〈ヘリンデ〉のくせに生意気なことを言いやがる。自覚してんなら自分でも直すように努力しろ。それに女が『責任を取れ』なんて無闇に言うもんじゃねえ！」

〈アデル〉と呼ばれた少年はそっぽ向いて舌打ちしながらも少女の文句に応える。

へリンデと呼ばれた少女はさすがのようにアデルに視線を向けてくる。

[illegible]

しかし、リンデは多忙でかまってくることが少ない両親を尊敬をし、愛していた。

自分は両親に愛されているのだと実感していたからだった。

それでも一人のときは寂しい。

もったかまってもらいたい。

けど、両親は人類軍の偉大な英雄。

〈三聖者〉と呼ばれる三人の内の二人だった。

両親が一生懸命働くことで多くの命が救われる。

ミッドガルドでは戦災孤児が多かった。

ほとんどが両親と周りの大人達が救い出して、引き取っていた。

リンデはそんな子供が増えないように我が儘を言うことなく両親を待ち続けるのだった。

両親はそんな健気なリンデを気遣い、ある日、一人の少年をリンデに紹介する。

少年はリンデと同じ年なのだろうか、一見して少女に見違えるような美人だった。

リンデは息をつくのも忘れて少年を見入った。

両親はそんなリンデに微笑み、少年を紹介する。

「この少年はアデルといって、私の大事な知り合いから託された子供だ。リンデ、今日からアデルのことを兄弟と思い、仲良くしてやってくれ」

リンデの父であり、元天使軍擁護派筆頭上級天使であるヘダルトス
／＼はアデルをリンデと向かい合わせる。

「アデルだ。よろしく…」

アデルはそっぽを向きながらも抑揚のない声で自己紹介をした。

その日からリンデとアデルは兄妹となった。

アデルは無愛想で無表情ながらも律儀にリンデの世話を焼き、リンデはそんなアデルを本当の兄のように懐き、慕うようになっていた。長く過ごす内に無愛想だったアデルはリンデの朗らかで明るい性格に感化されるように感情豊かになっていく。

アデルは皮肉屋で年齢に似合わない大人びた少年だった。

おそらくこれが本来のアデルの性格なのだろうか。

リンデに心を開いた故だったのかもしれない。

リンデもアデルと共に剣の稽古をつけ、色々な悪戯を教えてもらった故に現在のような生意気な少年っぽい性格になるに至った。

確かにリンデの言うようにアデルの責任といえよう。

リンデはアデルと過ごす時間を掛け替えのないものと感じていた。
もう寂しくない。

自分にはアデルがいる。

リンデは両親の手前、「いい子」になっていたが、アデルとの出会いをきっかけに我が儘を言ったり、甘えん坊になっていた。

そんなリンデをデルはやや苦々しく思ったが、両親はそんなリンデを歓迎した。

リンデはまだ、10にも満たない年頃の少女、少し我が儘な方が良いと思ったのだろう。

「ダルトスさんはリンデを甘やかしすぎです！」

あまりにも自分にべったりとしてくるリンデに辟易し、ダルトスに抗議するアデル。

「はははっ、確かにそうかもしれない。だったらアデルが厳しく躾てくれないかな。リンデはアデルを本当に慕ってるようだし、アデルなら安心して任せることができる…」

ダルトスは抗議してくるアデルをあやすようにして頭を優しく撫でてくる。

「それは親であるダルトスさんの仕事でしょう。俺にそんなことなんて…」

「君だからこそリンデを任せられるんだ。君は私の大切な友人の忘れ形見、だが、私は君を本当の息子だと思ってる。君も色々と整理が出来ないことがあるだろう。今は乱世だ。私やヘイリアに万一のことがあったときにリンデが頼れる君だけなんだ」

今は人類軍と天使軍は膠着状態だが、〈第二次聖戦〉の真っ直中、何が起こつても不思議では無い情勢である。

天使軍は極秘に特殊部隊の編成を行っているし、人類軍本部ヨツンヘイムは内政により血みどろの謀略戦が行われている。

いつ均衡が崩れてもおかしくない。

ダルトスは人類軍最高司令官としてこの情勢に振るいをかけなければならぬ。

いわば、一番の踏ん張り所である。

「そんな！ダルトスさんに万一なんて…」

そんなアデルをダルトスは両肩に手を添え、アデルの目を見つめる。

何時に無く優しげな眼差しで。

「私は天使軍を裏切り、人類軍に身を寄せているが、魂まで人類軍に売ってはいない。それはヘイリアもヘレイアも同じだ。だが、だったらなぜ、私やイリア、レイアが人類軍に協力して天使軍に敵対しているのか分かるかな？」

「……………」

アデルはダルトスのそんな優しげな眼差しから顔を逸らしたまま、何も応えなかった。

ダルトスはそんなアデルを抱きしめる。

「だ、ダルトスさん！」

「それは君やリンデ、里の皆を守りたいからだよ…」

アデルは何も応えれないまま、ダルトスの抱きしめられたままだった。

「アデル、私は愛する者を守るためだったら、如何なる強大な敵であろうと立ち向かっていく。例え勝ち目が無かろうとも、な…」

ダルトスは抱擁を解き、アデルを見つめる。

そんなダルトスにアデルは縋るように言う。

「人類軍の英雄〈三聖者〉の一人にして、天使軍最強のダルトスさんが敵わないような相手が天使軍にいるのですか？けど、現天使軍最強の〈双翼〉は滅多に前線に出たりはしないはずじゃあ…」

「いいや、ここだけの話、私よりも遙かに強い者が天使軍に一人いるのだよ。もつとも〈あの男〉が天使の域に当てはまるのどうかは微妙だけどね…」

「そんな、俺は〈双翼〉以外にそんな天使がいるなんて聞いたこと

がありませんよ!」

アデルはダルトスの言葉が信じられないように叫ぶ。

幼いながらもアデルは天使軍の情勢を把握していた。

アデルの両親がダルトスと同様に天使軍上層部の要職についていたからだ。

その両親もまたダルトスと同様に天使軍に離反したのだが、追跡部隊の手により、命を落としてしまった。

そんなとき、アデルを救ったのがダルトスとイリアであり、アデルは実の両親のように慕い、最強の天使として尊敬もしていた。

そんなダルトスより強い者が存在するなんて信じられなかったのだ。

「世界は広い。私よりも強い者なんて幾らでも探せばいるものだ。だが、私は奴よりも強く禍々しい存在は他に知らないんだよ。近い内に必ずこのミッドガルドに攻めてくる。情報によれば、天使軍は異種特殊部隊〈神殺し〉に対抗すべく極秘に特殊部隊を編成しているからな。おそらく、その部隊にいるのではないかと思うがね…」

「だったら、ミッドガルドから皆を退避させたほうがいいんじゃないですか?」

「そうすれば、天使軍にかえって怪しまれる可能性がある。ミッドガルドは山岳に囲まれているからね。逃走経路も予測されるだろう。ミッドガルドは翼が無い異種や天使以外にも普通の人間もいる。彼らでは万一にも逃げ切れないだろう」

ダルトスはそっぽを向くアデルの顔を正面に向けさせ、真剣な眼差しで見つめる。

「私も最善を尽くす。だから万一の時は、アデル、君がリンデを守ってくれ。頼む…」

そんなダルトスの真剣な表情に感化されたのか、アデルもまたダルトスの真剣な眼差しに向き合っていく。

ダルトスは自分にとって恩人であり、第二の親である。

そして、リンデは実の妹のように可愛がっている。

だから、アデルは応えるのだった。

「分かりました。リンデは命に代えても俺が守ります」

「子供が何を言っているんだ。守るだけじゃない。リンデと共に生きるんだ。命をかけるのは私達大人の務めだ」

ダルトスは再びアデルを抱きしめるのだった。

アデルはその日を境にリンデを厳しく躾ていく。リンデと共に生き延びるために…。

――

――――

リンデはアデルに縋るように言い、アデルの答えを待つ。

アデルはリンデにとって剣の師匠であり、兄であり、ダルトスが多忙で家にいないときでは父のように暖かった。

リンデはそんなアデルにべったりとし、甘えん坊になっていた。

しかし、ある日を境にアデルはリンデに対して厳しく睨るように接し始めたのだった。

剣の稽古ではリンデが泣こうと叫ぼうと冷然に叩きのめしていき、容赦が無くなってきたきたのだ。

それでもアデルがリンデに対して決して冷たくなつたのでは無く、優しく少し甘い兄から厳しくも優しい父親のような感じに変わっただけであり、リンデもそれを感じてか文句を言いつつもアデルに従っていた。

「甘えん坊のリンデが一人前になるまでは一緒にいてやるさ…」

アデルは縋るようなリンデに答える。

まだまだ自分も甘いなとアデルは思う。

けど…。

（アデル、君がリンデを守ってくれ。頼む…）

ダルトスがアデルに言ったことを思い出す。

（そうだ、俺はリンデを守る義務がある。いや、義務…だけじゃないな…）

アデルはリンデを見る。

彼女は自分の答えにやや不服なのだろうか、少し睨むようにして見つめていた。

「だったら、ボクは一人前にならなくたっていい！それでアデルと一緒にいられ…」

そう言いかけたリンデはアデルが厳しい目で自分を見ていることに気づく。

「一人前にならなくたっていい、だと…、甘えるな！！出会いもあれば、別れもある！両親だって、……それに俺だって永遠にいるとは限らないんだ！そんなとき一人になったらお前はもうするんだ！」

アデルの思わぬ激怒にリンデは肩を竦めた。

こんなに怒っているアデルは初めて見た…。

アデルはふっと怒気を収めて、リンデの銀髪を優しく撫で、厳しかった親がふと優しく子に言い聞かせるように説いてくる。

「いいか、リンデ。俺は可能な限りお前の側にいる。けど、いずれは皆、巣立たないといけないんだ。俺もお前も…。俺には実の親は

もういない。けど、お前の親は俺を実の息子のように愛してくれている。そんな大切な人達の愛に報いるのは何だと思う？」

「わからない…」

アデルはリンデの銀髪をくしゃくしゃと乱暴に撫でつける。

「リンデには少し難しい問題だったか。まあ、愛は見返りを求めないものだからな。けど、見返りを求めないからといって、返そうとしないのはどうかと思うがな…」

「アデルの言うことは難しいよ…」

リンデの言い分にアデルは苦笑する。

「まあ、自分でもはっきりとは断言できないからな。まあ、今はいい。ただ、これだけは覚えとけ。俺はお前は本当の妹のように愛していることをな…」

「アデル…」

リンデはそんなアデルを見て、何かを決心したかのように目を向ける。

その目は先ほどの縋るような、どこか甘えたような目はしていない。

「ボクもアデルのことを本当の兄どうか分からないけど、愛してる！だから、ボクが甘えん坊なのが、アデルが嫌だというだったら、ボクはもう甘えないように頑張る！」

「別にお前が甘えん坊なのが嫌じゃないが、それでも、まあ期待してるよ、可愛い妹分…」

アデルは再び木刀をリンデに向ける。

「まずは俺から一本取ってみせろ！まあ、甘えん坊のリンデには無理かもしれないがな…」

アデルは嘲るような笑みでリンデを挑発してくる。

アデルの剣技は里の大人と遜色無いほどの腕前である。

嗜む程度に剣術を習っているリンデでは到底勝てないどころか、一本取ることほぼ不可能のはずである。

る。

リンデ自身も承知のはずである。

けど、それでも敢えて挑発したのはリンデの想いがどれほどかを見極めたかったからだ。

「必ず一本取ってみせるよ！そして、アデルに認めてもらうんだ！ボクはもう甘えん坊なんかじゃないってね！」

リンデもまた、木刀をアデルに向ける。

「だったらかかってこい！リンデ！」

「いくよ！アデル！」

再び乾いた音が広場から響くのだった。

ダルトスとイリア

「はぁ、はぁはぁ……………」

リンデは地面にぐったりと大の字になっていた。

「まあ、こんなところか…」

アデルは木刀で肩を叩きながら平然と地面にべったりしているリンデを見下ろして笑う。

「くそー、まだ…まだ…くっ…」

リンデは立ち上がろうとしたが、足に力が入らないのよろけて、再び倒れようとした。

「よつと」

倒れる瞬間にアデルがリンデを支える。

「無理するな。甘えるなど言ったけど、努力した末で出来ないことに関しては別腹だ。お前はよく頑張ったよ、さあ、おぶってやるよ」

「アデル…」

「言っただろ、お前が一人前になるまで側にいるって。けど、いつか自分の足で立てるように頑張れよ」

「やっぱり優しいね、アデルは…」

「甘いのと優しいのとは別腹なだけだ…」

アデルはリンデを背負い、家路をゆっくりと歩いていく。

「あら、またこんなに泥だらけになっちゃって…」

迎えてくれたのはヘイリア・エスカレーネ、絶大なエーテル力を誇る異種であり、三聖者の一人、ダルトスの妻でもある。

腰まである銀髪に健康的な小麦色の肌が特徴で出るところは出ている成熟した大人の女性である。

ちなみにアデルの初恋の女性でもあった。

「泥んこになってるのはリンデだけど、懲りずにアデル君に向かっていったんだねえ…」

「むー、アデルがなかなか一本取らしてくれないんだよ！」

「まあ！アデル君から一本なんて、リンデ、あなた身の程知らずもいいところよ。蟻が象に立ち向かっていくようなものよ」

リンデの文句もイリアはのほほんとした口調で容赦も欠片もなくバツサリと叩き切る。

リンデは止めを刺されたかのように魂が抜けたかのように呆然とした。

穏やかな雰囲気で誤解されやすいが、イリアの中で敵対するものには容赦という文字は存在していなかった。

花を手折るように微笑みながら敵を屠っていく姿は裁きの女神と恐れられるほどである。

ダルトスが三聖者最強ならイリアは三聖者最恐であった。

「相変わらずイリアさんはバツサリと切りますね…」

アデルは苦笑しつつ、石像になったアデルをよっこらせと下ろして塗れタオルで顔を拭いていく。

「アデル君、あなたは私たちの家族なんだからお母さんと呼んでくれた嬉しいかなー」

イリアは目を輝かせてアデルにすり寄ってくる。

黙ってれば、プロポーションもあり、風に靡けば幻想的な銀髪、野性的な小麦色の肌で凛々しい戦乙女のような風貌のハンサム美人、そんな彼女がぶりっこのように見つめるというギャップに大抵の男性は墜ちてしまうだろう。

普段無愛想なアデルもまた例外ではなかった。

「…………お、おかあ…………さん」

そっぽ向きながらも辿々しくお母さんとアデルは言うのだった。

周囲から子供ながらも大人びていると言われているアデルも初恋の女性であるイリアの前では形無しだった。

そんなアデルの様子をイリアは身体をプルプルと震わせて見ていた。

そして、アデルの後頭部に両手に回して、豊満な胸に埋めていく。

「もうなんて可愛いのかしら！私，こんな可愛い息子を持ちたかったのよ！愛してるわ，アデル君！」

イリアはアデルの顔にキスの雨を降らせていく。

石化から復活したリンデはイリアにされるがままのアデルに気づき、引きはがそうとする。

「もうお母さん，何やってるんだよ！アデルが困ってるでしょ！この…って，ちよっ…むぐっ！」

アデルを引きはがそうとするものの，イリアとは体格も腕力も違う。奮闘しているリンデにイリアは気づき，アデルと同じように抱き寄せる。

「リンデ，私がアデル君を可愛がってるからって嫉妬してるのね。けど，大丈夫！リンデも私の可愛い娘よ！んー！」

そして，リンデにもアデルと同じようにキスの雨を降らしていく。こうして，リンデとアデルはイリアにもみくちゃんにされていった。

「やれやれ、美人が三人揃えば姦しいと言ったところかな」

ダルトスもまた帰宅し、三人の微笑ましい様子にコメントを述べた。

「あら、お帰りなさい、あなた。美人だなんて照れるわね」

「お帰りなさいませ、ダルトスさん。美人って、俺男ですよ…」

「お、お父さん、助けて！お母さんに食べられる」

イリアは初な少女のように頬を染め、アデルは女扱いされたことにキスマークまみれの顔を慄然とし、リ

ンデはキスマークと涙でぐちゃぐちゃになった顔で助けを求めた。

「イリア、ただいま、お前は今でも最高の美人だよ。アデルは下手な女性よりも美人だからな、それと私のことをお父さんと呼んでくれると嬉しいな。それとリンデ、お前が美人なのは認めるが、今の顔は…：ちよつとしたホラーだな…。アデル、リンデ、二人共さきに風呂に入って身体の汚れを落としてきなさい。それから食事しよう」

「うん！アデル、一緒に入ろう！」

リンデはアデルの腕を引っ張っていこうとする。

「おい！俺は男でお前は女だぞ！わ、分かってんのか？」

アデルはリンデの手を振りほどき、顔を赤くして怒鳴る。

「そんなん気にしないって！他の男ならともかく、アデルだったら家族だし、兄さんだし、それに…」

リンデは立ち止まり、顔を少し赤くして下を向く。

そんな二人の様子を生暖かく見守るダルトスとイリア。

「別にかまわないのではないか、アデルとリンデは家族で兄妹だしね。それにアデルだったら安心してリンデを任せられるしね」

「そうね、家族なんですもの。遠慮は入らないわ、リンデ。思う存分にアデル君を悩殺してらっしゃい」

二人はリンデに暖かいエールを送っていた。

二人の関係を押し進めと言わんばかりのものだった。

「というわけでお父さん達も良いって言ってるから行こうよ！」

リンデは剣の稽古で見せなかったような俊敏な動きでアデルの背後を取って、首根っこを掴んで浴室までずるずると引きずろうとする。

「悪い意味で大らかすぎるぞ！あの夫婦は！って、おい！リンデ！いくらなんでも…ひきずるなあああ！」

アデルの悲鳴は浴室の扉が閉まる音と共に途切れるのだった。

「フッ、青春してるな」

ダルトスは二人の様子に笑った。

イリアも笑っていたが、ふと表情が沈んでいく。

そんなイリアの様子に気づき、ダルトスはイリアを自分の胸に寄せていく。

「どうしたんだ、イリア」

「ねえ、あなた。私ね、どんな過酷な戦場でも恐怖なんか感じたことなかったのよ」

「……………」

「私は今の生活を気に入ってるの。あなたがいて、リンデがいて、アデル君がいて…けど…」

「この幸せ過ぎる生活がいつか壊れるんじゃないかと思うと怖くなった、か…」

ダルトスはイリアの言葉を先読みして言った。

イリアは顔を上げて、ダルトスの顔を見る。

ダルトスは安心させるようにイリアに微笑みかけ、抱きしめていく。

「あなたには全部お見通しなのね。そうよ、私は怖い。いつか《あの男》が私達の生活を壊しにくるんじゃないかって…。弱くなったものね。これじゃあ三聖者失格ね…」

「恥じることは無い。君は三聖者である前に私が愛する妻であり、

リンデとアデルの母なのだから。家族を失うことに恐怖を抱かないほうがおかしいだろう。私も怖いさ。それでも……」

ダルトスはイリアをさらに強く抱きしめる。

「私たちは守らないといけない。愛する家族を、故郷を」

「そうね、子供達の未来を守るためにも…」

ダルトスは抱擁を解く。

「さてと、夕食の準備をしないといけないな。イリア、これを捌いてくれ」

「ダルトス」

「何だ」

イリアはダルトスの唇に自分のそれを重ねる。

「愛してるわ……」

「私も愛しているよ、イリア」

[illegible]

ミッドガルド付近に忍び寄る影。

「恩赦をくれるといっても割に合わない任務だな…」

「魔界に墜とされた方がマシだんたんじゃねえか？」

ぼやきながらも気配を殺して歩んでいるのは中級の天使兵。

50人ほどの部隊でミッドガルドへと潜入しようとしてたときだった。

「いや、魔界に墜とされどころか、それ以上に恐ろしい《あの御方》に消されてしまうぜ…」

「《あの御方》って誰ですか？」

比較的まだ若い天使兵が先輩天使兵に聞いてくる。

「極秘で編成されているある特殊部隊の隊長らしい。恐ろしいのは天界きつての凄腕の拷問官であることだ…」

「え、拷問官…」

「第二次聖戦中期当たりから頭角を現したらしいが、注目されたのは捕虜にしたヒトなんだが、人類軍の中でも重要なポストに就く者だったらしく、気位の高い難儀な性格の奴だったらしい。当然、要職についてたことだから重要機密を持っていることは予想されていた。そのときに尋問を任されたのが、その《あの御方》らしい」

「で、その捕虜は吐いたのですか？」

「吐いたのはではなく、吐かされたというべきだな。およそ筆舌し難いほどの拷問をして、魔界の堕天使も真っ青なほどの残虐な方法だったらしい。まあ、それで人類軍に対し、戦況を優位に進めれたわけだが…」

「魔界の堕天使も真っ青な残虐な拷問ですか…」

『無駄口はそこまでにしておけ』

天使兵達の耳に無機質な声が響く。

「クライアント」

音も無く、幽霊のように現れたのは漆黒のフードを身に纏い、顔を伏せている者。

フードの者こそ、今回の作戦の実行隊長である。

天界の律法を犯し、魔界の墜とされる天使兵に恩赦を与える代わりにこの任務を与えた者。

「お前達は黙って任務を遂行すればよいのだ。さすれば、恩赦が下され、晴れて自由の身となるのだからな…」

天使兵はフードの者が放つ威圧感に声を失っている。

「だが、失敗すれば、お前達は《隊長》が新しくお考えになられた拷問法のサンプルになるだろうな…」

フードの者は笑う。

天使兵は顔面が蒼白になっていく。

「安心しろ。お前達の果たすべき最低限のことはその《棺》をミッドガルドへと放つことだ。至極簡単な任務だろう」

《棺》

それは天使の翼により編まれた縄で幾重ほどの嚴重に緊縛した棺だった。

『ググ…ガア…ア…ア』

棺には獣が唸るような声が聞こえていた。

それは棺から出ようと縄を破ろうとあがいているようだった。

早くこの棺をミッドガルドに捨てていきたい。

天使兵の誰もがそう思っていた。

「クククッ…、ダルトス様、イリア様、もうすぐです。もう少しで安息の日々に終わりの時が告げられますよ…。この棺が破滅への序曲となるのですからね…」

刻々とミッドガルドに影が忍び寄っていた。

空が紅く染まる刻（前書き）

戦闘シーンは難しいですけど、大好きです。拙い文章ですが、それでも良かったらご覧になってください。

空が紅く染まる刻

濃い霧の森。

少女は霧の森を歩いていた。

「はあ…はあ…はあ…」

肩まで掛かった銀髪に雪のように白い肌、白いワンピースで着飾った少女は今にも霧のように儚く消えて

しまいそうな雰囲気だった。

唇は蒼白となり、額に汗を流した状態から何らかの病にかかっている様子だった。

それでも歩みを止めることなく少女は歩き続ける。

辿っているのは白の霧が立ちこめる中、禍々しくも深紅に染めていた血の跡。

彼女の命はもう長くはない。

それでも黄昏に染まった道を歩んでいく。

「私は…」

（ボクは…）

紅い道を辿れば辿るほどの血の臭いが濃くなってくる。

そして、荘厳なるパイプオルガンの音色が聞こえてくる。

「なぜ…」

（どうして…）

霧が濃くなってくる。

「歩いているの…」

（歩いてるんだろう…）

『おい』

『おきろ』

「おきろ！リンデ！」

「っあ…」

リンデは起き上がる。

横を向くとアデルが呆れた顔をしていた。

「やっと起きたか…。随分うなされた感じだったけど、なんか悪い

夢でも見たんか？」

「ボクだけどボクでない女の子が白い霧の森を歩く夢だった…」

まだ、意識がはっきりしないのかリンデは独り言を言うように虚ろである。

「血で塗れた道を辿ってたんだ。パイプオルガンの音が響いてて、女の子は病気になるって…」

アデルは呆れた顔から真剣な表情になる。

リンデが話しているのはただの夢の内容、そのはずだが…。

アデルは何か開けてはいけないパンドラの箱を暴こうとしているように思えた。

「夢の話はもういい。それより朝食だ。早くベットから出て支度しろよ」

そう言ってアデルは部屋から出ていく。

リンデはまだ虚ろなままだった。

（自分だけと自分でない女、霧の森、血痕の道、何か胸騒ぎがする…）

アデルはリンデの夢の内容が何となく嫌な感じがしていた。

「アデル君、おはよう。何難しい顔してるのよ」

イリアはほんわかと笑い、アデルに抱きついてくる。

（何となくだけど、お母さんにリンデの夢の内容を言ってみようかな）

「お母さん！」

突然のアデルの真剣な口調にイリアはびくつとし、頬を染めるようにして悶える。

「なにアデル君！ひょっとして告白するのかなあ。ダメよ、私にはダルトスがいるから。けど…ときどきなら…」

「何訳の分からないことを言ってるんですか！それにときどき…つて何するつもりだと思ってるんですか」

「あら、その話じゃないの？」

「違います！」

アデルはイリアによって乱されたペースを持ち直し、改めて夢の話をしようとする。

「別に大したことじゃないんですけど、何となく気になりました…。リンデが妙な夢を見たらしいんですよ」

「妙な夢って、妙だからこそ夢なんでしょ？」

「まあ、聞いてください。自分だけ自分ではない女が霧の森で血

に染まった道を歩いている内容なんですよ。さらに女は病氣にかかっていると何とか…。あとパイプオルガンが聞こえたと言ってますね」

アデルがリンデの夢の話をしていくうちにイリアのいつものようなのほほんとした表情は消えていた。

「その夢の内容、本当にリンデはそう言ってたのね？」

イリアの表情は戦場で裁きの女神と呼ばれたような鋭い威圧感があった。

[illegible]

天使兵サイド。

「もうすぐミッドガルドに着く頃だな。それなのに天使なのに劣種のように地べたを這いずり回らんとはいけんとはねえ……」

「それももう終わりだな。一刻も早くこの物騒な棺を置いていこう」

ぜ」

天使兵は先に進もうとする。

「これ以上進むな」

だんまりだったフードの男が突如声を発していた。

「どうしたんですか？もうミッドガルド直前ですぜ」

天使兵は今更怖じ気づいたのかといわんばかりに言ってくる。

「愚か者め、直前だからこそだからだ。見るがいい」

フードの男は足下に落ちている小石を拾い、天使兵が進もうとした先に向かって投げた。

小石は丁度天使兵が進もうとした先の空間で一瞬にして灰となって散っていった。

「なんですかい！これは！」

「戦略級の超広範囲結界（イージスの盾）だ。貴様がもしこのまま進んでいたら、灰となって散った小石と同じ運命を辿ったわけだな……」

「ひえー、おっかねえ。けど、これじゃあ先の進めませんぜ」

「フツ、案ずるな。この程度のことは想定内だ。さて、始めるとするか……」

フーダの男は先に進み出す。

「おい、あんた！灰になって…」

フーダの男は手を前にかざす。

「我が血肉より全てを黄昏に染めん……」

ミッドガルド全域を覆っていた結界が黄昏に染まっていく。

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

「おい、空が紅く染まってきたぞ！」

「いったい何なんだ！ あれは！」

アデルとイリアは外が騒がしくなっていることに気づき、家から外に出ていく。

「夢の話は後にしましょう！ みんな落ち着いて！ 何が……」

イリアは空は見上げた途端、言葉を失う。

それはアデルも同様だった。

深紅に染まった空。

「イリア！アデル！無事なのか！」

ダルトスが駆けつけてくる。

「私達は大丈夫よ！それよりもあの紅い空はいい…！」

「私にも分かんない！だが、どうやらイージスの盾は破られたようだな…！」

常に冷静であったダルトスが舌打ちせんばかりに苛立った声を出していた。

「イージスの盾って、あの戦略級の結界が破れたんですか！？」

アデルは愕然としていた。

戦略級超広範囲結界〈イージスの盾〉は天使軍が第一次聖戦時に人類軍に対して優位にする要因の一つだったからだ。

上級天使でなければ使用できない超高密度エーテル。

人類軍の大量殺戮兵器ですらも微塵も寄せ付けないほどの強固な結界であり一つの伝説でさえあったのだ。

それが斯くも呆気なく破られてしまった。

深紅の空に亀裂が走る。

「総員撃ち方用意！」

里で戦える異種、天使、人間がダルトスの号令の元、一糸乱れない動きで〈エンジンリウム〉で加工されたサブマシンガンを一斉に構える。

空間の亀裂が弾け、一斉に天使兵が群がってくる。

「ファイヤー！！」

一斉に火を吹くサブマシンガン。

狩りで落とされる鳥のように打ち落とされていく天使兵。

しかし、天使兵も応戦してくる。

「ホーリーアローを放てええっ！！」

天使兵の手元にエーテルにより圧縮されて形作った弓矢が次々と出現していき、矢を放ってくる。

深紅に染まった空から純白の矢の雨がミッドガルド全域に降り注がれていく。

爆撃音が至るところから響き、平和だったミッドガルドが瞬く間に血みどろの戦場となっていく。

「裁きを受けろ！劣種共め！」

爆撃と共に一斉に降下してくる天使兵。

「神のイヌなんかに負けてたまるか！俺達を嘗めるな！」

エンジンウムで加工された装具で天使兵に立ち向かっていく里の戦士達。

「私達の手でこの里を守り抜くんだ！いくぞ！」

ダルトスはエーテルにより剣を生み出し、天使兵を次々と斬り捨てていく。

「死ねええ！裏切り者め！」

天使兵の一人が両手にエーテルソードを持って、ダルトスに斬りかかってくる。

カキンッ！

ダルトスは同じくエーテルソードを生み出し、天使兵の剣を受け止めた。

「中級天使如きに討たれるほど私は安くはないつもりだがね」

受け止めた剣ごとに天使兵を薙ぎ払い、エーテルソードをもう一つ生み出し、二刀流の構えをとった。

「私達の故郷に害をなす者共に裁きの刃を…」

ダルトスの周囲に群がる天使兵が次々と血飛沫と共に崩れていく。

「くっ！ダルトス様相手に接近戦で挑むな！遠距離攻撃で仕留めろ！」

「甘いな。接近戦だけと思うのか？」

距離を置いてホーリーアローを放とうとしている天使兵部隊に向けて、ダルトスは剣を軽く振るう。

その瞬間、剣圧が刃となって天使兵を切り刻んでいった。

「我が名は元人類擁護派上級天使筆頭にして、三聖者が一人、ダルトス・エスカレーネである！我を討ちたのであれば、その身を粉にしてかかってくるがいい！セイントバースト！」

ダルトスは持っていたエーテルソードを直径10メートルほどの光球に変え、天使兵が密集する場所に向かって投げつける。

凄まじい爆音と共に天使兵達の肉片が飛び散っていく様子が他の天使兵には恐怖を里の戦士には希望を与えた。

「我に続けええ！」

「ダルトス様に続くんだみんな！トリ野郎共をぶったおしてやるんだ！」

ダルトスの鬼神の如きの戦いに里の戦士達は士気を上げ、銃火器が

火を吹かせて天使兵を次々と落としていった。

「みんな落ち着いて！戦場で我を失ったら死を招くわ！」

「お願いアデル君、リンデを守ってあげて！」

言いかけようとしたアデルの唇にイリアは人差し指を押し当てる。

「……分かりました。リンデは俺が何としても守ります。それと……」

「別に母さんは腐っていませんよ。今でも俺が尊敬する綺麗な女神様です」

イリアは哑然としてアデルを見る。

そして、肩を震わせて笑い出した。

「私を一瞬とはいえ、石化にするなんて……、でも、ありがとう……」

イリアはアデルの額に口づけする。

「さあ、行きなさい！ここは私達で何として守り抜くのよ！」

アデルはリンデの下へと駆け抜けていき、イリアは襲撃してくる天使兵を見据えた。

手にはいつの間にかエーテルで出来た鞭を持ち、威嚇するように地面を薙ぎ払う。

「さてと…、私達の故郷を土足で踏みにじった愚かで哀れな天使共、覚悟はいい？とびつきりな恐怖を送ってあげるわ…」

イリアは鞭を振るい、襲いかかってくる天使兵の膝から下を吹き飛ばしていく。

足を切断された天使兵は足を流しながらもイリアを見る。

イリアはそんな天使兵を虫けらのように見下し、周囲に次々とエーテルによって生み出された光輝く狼が

現れる。

「生きたまま私の可愛いホーリーウルフに喰い散らかされるといいわ…」

天使兵は恐怖に青ざめる。

ホーリーウルフ達は足を切られて動けない天使兵にゆっくりと近づいてくる。

「何あわててるんだ！足が無くても我等には翼があるはず…ぎゃあああ！」

背中から鮮血が吹き出し、倒れていく天使兵。

背後には腕から剣を伸ばし、血塗れた異種達がいた。

「姐さん、何面白いことやってんですか。俺達も混ぜてくださいよ」

獰猛な笑みを浮かべて躍り寄る異種達。

襲撃してきた天使兵は戦慄する。

異種は手を足を刃に変え、天使兵を切り刻んでいく。

頸動脈を切り裂き、血を噴き出させ、頭部や腹部にエーテル波を叩き込み、脳や内臓が飛び散るように惨殺する光景はまさに悪夢だった。

これが人類軍最恐と呼ばれる裁きの女神と呼ばれるイリア・エスカ

レーネが率いる部隊なのか……。

彼らは武力もさることながら、徹底して残虐に殺していくことで敵兵の士気を挫くことを得意としている。

ダルトスが率いる部隊へと襲撃すれば良かったと天使兵は後悔するのだった。

「貴様達、今、ダルトスの部隊を襲えば良かったと思っただろう。ますます許し難いな。思う存分に恐怖に震えるといい！」

いつものほんとした口調から女猛将に相応しい苛烈な口調となり、天使兵を容赦なく殺戮していく人類軍最恐の裁きの女神。

愚かで哀れな天使達の絶叫が響き渡るのだった。

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

爆音が響き、リンデは虚ろな表情から生氣を取り戻し、状況を確認する。

「天使が襲撃してきてるの？」

ダルトスから聞いた話だとイージスの盾を里全域に展開しているから、上級天使等が一兵卒として襲撃してこない限り安全だろう、と言っていた。

上級天使は絶大な力を有しているが、少数のため、ほとんどが後方指揮してゐるらしい。

例外は〈双翼〉の一人であり、天使軍最強の猛将〈ウルキヌス〉と〈双翼〉に次ぐ実力者で三聖者最恐のイリアに宿敵と称される女將軍〈リディエル〉であつた。

二人の上級天使は果敢に前線で猛威を振るい、幾度も三聖者と激突したことがある、その壮絶な死闘は戦場の語りぐさになるほどであつた。

「お父さんが言っていたその上級天使が仕掛けてきたのかな？ それよりも早くみんなに合流……」

がしゃーん！

自宅の家財が破壊される音が響く。

『おーい、誰かいらないのかな？ 神々しくも怖い天使様がやってきたぜ……』

獲物を痛ぶろうと嗜虐的な声を出してくる天使兵。

リンデは恐怖に震える。

毎日アデルに剣の稽古をつけてもらつてるとはいえ、実践経験は皆

無，戦場に出たことがない。

自分に出来ることは逃げ延びて助けを求めること。

リンデは天使兵に気づかれないように気配を殺して自宅から出ようとする。

『くっくくっ…。生命反応がするぞ。上手く気配を消したつもりになるとは笑えるねえ。これは…異種か。男だったらミンチになるまで捌り殺すが，女だった飽きるまで犯し尽くしてやろうかなー』

天使兵の足音がゆっくりだが，確実に近づきつつあった。

怖い…。

怖い！

怖い！

けど…。

震える体を押さえて，必死に自宅から出ようとするリンデ。

天使兵は獲物に恐怖を与えるため，わざとゆっくりとした足取りで追い詰めていく。

『俺の名はヘダレス，一応元中級天使小隊隊長だ。まあ，やんちゃが過ぎて犯罪者になっちゃったがねー』

リンデは必死に息を殺して，出口まで這いずっていく中でダレスは

あざ笑うかのように獲物にはなしかけ

ながら近づこうとしていく。

（こんなところで死んでたまるか！ボクはまだ…）

『戦場は泥臭くて嫌いだね。けど、楽しいこともある。それは略奪さ』

（お父さん！お母さん！………アデル！）

『火事場で金をむしり取り、女をコマにする。最高だ…』

（後少しで！後少しで出口…）

そのとき、自分のすぐ後ろで足音が聞こえてきた。

「みーつけたー。これはこれは可愛い子猫ちゃんだね」

リンデは恐怖に青ざめる。

「いい顔だ。つくづく思うぜ。俺は天使なんかよりも悪魔に産まれてきたほうが良かったとな…」

ダレスは舌なめずりしながらリンデに近づこうとしていく。

（もうここまでなの。何も出来ずにこの天使にいいようにされて…）

（甘えるなど言ったけど、努力した末で出来ないことに関しては別腹だ）

ふとアデルの言葉が脳裏に浮かぶ。

（そうだ、まだボクは自分に出来ることを、努力することをしてない！）

リンデは手にエーテルを凝縮させ剣を形作った。

「ほう、子猫ちゃんが俺と戦おうっていうのかね」

「子猫ちゃんじゃない！ボクは……ボクは三聖者の一人、ダルトス・エスカレーネの娘、リンデ・エスカレーネだ！」

リンデはエーテルソードをダレスに向ける。

ダレスは肩を震わせる。

そして、発狂したかのように笑い出す。

「ひゃひゃひゃはははあぁ！そうか！貴様があの糞忌まわしい三聖者様の小娘だっていうのかよ！」

ダレスはふと笑みを消し、剣を構える。

「これほどの上玉、俺はつくづく運がいいぜ！クライアントに差し出す前にたっぷり味見させてもらおうか！」

凄まじい速度でダレスが剣撃を繰り出してくる。

（アデルのに比べたら遅い、これなら……）

リンデはダレスの剣を受け止める。

しかし…。

（お、重い！これが戦場での剣なのか？）

リンデは膝を折って、剣を何とか受け止める。

そんなリンデをあざ笑うかのようにダレスは剣をそのまま押しつけてくる。

「ほう、俺の剣を受け止めるとはね。少しは剣のお稽古してたのか。が、戦場を知らない剣だな。その程度で刃向かおうなんて片腹痛いぜ！」

ダレスはそのまま剣を振り払い、リンデを弾き飛ばしていく。

「がっ！」

リンデは壁に激突し、呼吸困難に陥る。

（やっぱり、ボクなんかじゃ…）

『あきらめないで…』

リンデの脳裏に白いワンピースを着た儂げな少女が浮かぶ。

それは夢で見た血の道を辿っていた少女。

(ボクだけどボクでない女の子…)

雰囲気は違えど顔立ちはリンデと同じ。

『私はあなた，けど，あなたはあなた…』

(何を言ってるの?)

『生き延びて！彼奴を，へあの人◇を止めるまで…』

そのとき，リンデの意識は真っ白となる。

リンデはゆっくりと立ち上がる。

「なんだ，まだやるってのか。だったら腕一本はもらっ…」

どさっ。

ダレスの足下に何かが落ちる音がする。

ダレスは足下を見る。

それは何か見たことがあるモノだった。

「俺の……うで？」

ぶしゃあああ！

「爆発音、ダルトスさんの家の方角だ！くそっ！」

アデルは必死に駆けつけていった。

リンデは大切な妹分、
けどそれ以上に……。

いや、今はリンデを助けることだけを考えよう。

「無事でいてくれ！リンデ！」

[illegible]

リアを貫き、容赦無く撃ちつけていく。

「このアマ！なめるなああ！」

ダレスは弾丸により血まみれになりながらも強引に巨大剣を振り、弾丸をまといはじいていく。

「うるああああ！」

ダレスは巨大剣をリンデに叩きつけていく。

超重量の剣を支えきれなくなったのか、リンデの体は上空から地面へと叩き落とされる。

さらなる爆発音が響く。

「どこだあああ！どこにいったあああ！」

リンデの放った弾丸により、全身の肉が裂け、片腕を無くし、血まみれになったダレスは怒りのままに周囲にエーテル弾を撒き散らしていった。

彼は中級天使といえど限りなく上級天使に近い戦闘力を誇り、中級天使の中では最強クラスだった。

それに慢心し、律法を犯し、今に至っていた。

しかし、年場のいかない小娘に手酷い傷を負わされ、屈辱に怒り狂っていたのだ。

もはや彼の心はリンデを嬲り殺すことが全てとなっていた。

[illegible]

(...)は...)

リンデは目を覚ます。

（ボクはいたい…）

（そうだ、確か天使に追い詰められて、女の子の声が……）

思い出せない。

自分がなぜ、こんな状況になっているのかが…。

周囲は炎に包まれていた。

体中が痛い。

(もう死ぬのかな…)

お父さん。

お母さん。

アデル。

（最後にアデルから一本取りたかったな…）

（そしたら、アデルに…）

『生キタイカ？』

（誰？）

突如、脳裏に声が響く。

女の子の声じゃない。

『生キタイカ？』

（生きたい）

『ナラバ翼ヲ喰ラエ…』

（翼を？）

『ソウダ、天使ノ翼ヲ貪レ…』

（天使の翼…）

『食欲ニ際限無く喰ライ尽クスノダ！』

『駄目！彼の声に耳を…』

女の子の声が割り込もうとするがかき消される。

「ボクは……」

リンデは立ち上がる。

目が深紅に輝いていた。

「翼ヲ喰ヲウ……」

強大で禍々しいエーテルの力が吹き荒れる。

[illegible]

ダレスは感じていた。

禍々しい凶悪なエーテルの力を。

「なんなんだ！この寒気がする力の波動は！」

エーテルの反応が自分に近づいてくる方向を確認する。

「そこかあああ！」

巨大剣を振るい、波動を感じる方向にエーテル波を放つ。

どごお おおおん！

砂煙が舞う中、ダレスに近づいてくる影が見えてくる。

ダレスが放ったエーテル波に異に返さないかのように。

「この、化け物があああ！」

ダレスは何度もエーテル波を放つ。

しかし、影の歩みは止まらなかった。

「こうなったら直接叩き斬ってくれるわあああ！」

ダレスは巨大剣を振りかぶって近づいてる影に向かっていき、斬りかかっていく。

だが、影にもう少しで剣が当たりそうになったとき、何かに捕まれたかのようにして剣が止められる。

「な、何だと…」

ダレスは驚愕する。

自分の剣がリンデのか細い手によって受け止められていたからだ。

リンデの血よりも赤い瞳がダレスを捉える。

「翼ヲ…喰ラウ」

「ひiiiiiiii!!」

これは自分の手に負える次元の化け物ではない。

そう思い、ダレスは背を向けて逃げようとする。

だが、それは致命的なミスだった。

ぶちぶちぶちっ！

「ぎゃあああああああ！」

リンデは瞬時にダレスの背後に行き、翼を引きちぎったのだ。

ダレスの背中から鮮血が吹き荒れる。

ダレスは振り向き、リンデを見る。

リンデの手から血管が浮かび、千切り取った翼が吸血されたかのようにしぼんでいき、リンデの手に吸収されていく。

（俺は…誰と…戦って…たんだ…）

最初見たときは初めての戦場に震える弱い女だった。

だが、今日の前にいるのはなんだ？

〈翼喰らい（ウイングブレイカー）〉

異種で最も凶悪で天使軍が危険認定していた存在。

天使の翼をエーテル力に変換し、際限無く力を高めていくモンスター
1。

第二次聖戦中期に三聖者、いや【四聖者】の一人として天使軍に恐れられたあの…。

リンデはいつの間にダレスの目の前におり、血塗れたエーテルソードを振り上げていた。

「死ネ…」

ずばっ！

ダレスの意識はリンデの刃により両断されていった。

――――――――――

――――

アデルはダルトスの邸宅、いやダルトスの邸宅だった場所に辿り着く。

周辺は瓦礫の山となっており、所々が炎上していた。

リンデは無事なのか？

ひよつとしたらもう…。

「いったい何が起こったんだ！リンデ！リンデえええ」

アデルの声が深紅に染まった空に響くも誰も応えない。

徐々にアデルの心が絶望に染まっていく。

「ちくしょう！守るって誓ったはずのに…」

地面に蹲り、アデルは涙を流す。

そのときだった。

途轍もなく邪悪なエーテルを感じたのだ。

極寒の氷河の如くの冷たい殺気。

アデルは顔を上げて見る。

全身が血に塗れ、血塗られた剣を携え、深紅の瞳を持つ少女。

「リンデ：なのか？」

アデルはただただ呆然とする。

そんなアデルにリンデは冷たく微笑む。

「オ前ノ翼ヲ喰ワセロ…」

リンデとアデル？

リンデは悠然とアデルに近づいてくる。

アデルは後ずさった。

「何を言ってるんだ？」

アデルは無意識のうちにエーテルソードを出していた。

今のリンデは普通ではない。

「オ前ノ翼ヲ……ウツ……ググツ！」

リンデは突然、頭を抱え、苦しみ出す。

[illegible]

『やらせない！』

かき消されたはずの女の子の声がリンデの脳裏に響く。

『貴様…マダ…消エナイノカ…』

邪悪な声が対抗するかのように響く。

『リンデは貴方の人形なんかじゃないわ!』

『クッククツ、人形サ、私ノ大望ヲ叶エルタメノ大イナル器ヨ…』

『どうして、そこまで貴方は…』

『今ハマダコノ器ノ好キニサセテヤロウ、内側ヨリモ外側カラコノ人形ニ絶望ヲ与エテヤルサ、近イウチニナ、クククツ……』

『どこまでも悲しい人、もし、私がこんんでなかったら私が貴方を…』

『……………』

邪悪な声はもう響かなかった。

『必ず止めてみせるわ、————…』

『さあ、目覚めてリンデ…』

—————
—————

「リンデ！目を覚ませ！」

アデルは苦しむリンデを抱き寄せた。

リンデの体から力が抜ける。

同時に凍えるほどの邪悪なエーテルが消えていく。

「あっ…アデル…」

リンデはいつもの青色の瞳でアデルを見つめ、微笑む。

「助けて…くれて…ありが…とう…」

リンデはそう言って、眠りにつくのだった。

――

ダルトスは天使兵を薙ぎ払いながらも視線を感じ、天使を両断しつつ、顔を向ける。

視線の先には漆黒のフードを纏った者がいた。

「さすがは〈隊長〉が見込んだだけありますね。大した強さだ」

「何者だ？」

フードの者は慇懃無礼にお辞儀する。

「これは申し遅れました。私は〈隊長〉の部下の一人、〈ギエル〉と申す者です。ダルトス様……」

フードを脱ぎ、素顔を晒しだしてきた。

フードと同じ漆黒の髪を靡かせ、瞳は血よりも紅い緋色だった。

緋色の瞳はダルトスの姿が映っていた。

ダルトスは久しく感じてなかった感情を思い出した。

それは恐怖。

（彼奴と相対して以来だな……）

「ギエルとやら、お前がこの天使部隊を引き入れた張本人に相違無いか？」

「だとしたら、如何致しますか？」

「こうするさ！」

ダルトスは直径10メートルもの光球を生み出し、ギエルに向かって投げつける。

必殺のセイントバーストだった。

「せっかちな方だ…」

ギエルは蠅でも払うかのようにして手を振るい、10メートルもの光球を弾いていく。

弾かれた光球は天使兵等に激突し、悲鳴と共に霧散していく。

「貴様、味方の天使に…」

ギエルはダルトスの義憤に意に介しないかのように笑う。

「そうでした、特別サービスに貴方様が愛する故郷に群がる害虫を駆除して差し上げましょう」

ギエルの周囲に剣ほどの大きさの深紅の針が大量に出現する。

「天使部隊の皆、任務は無事に果たすことができた。ゆっくりと眠るがいい…」

深紅の針は一斉に放出され、里に潜入した全ての天使兵の額を貫き、

濃い霧の森。

私はひたすら血の跡を辿っている。

なぜ、と聞かれても分からない。

ただ、一つ言えることは。

この先に私の〈運命〉が待ちかまえている。

私を解き放つ〈翼〉が待ち受けている。

荘厳に響くパイプオルガン。

全てを覆い隠す白い霧。

ふと私を導くかのように霧が晴れていく。

そこには古びた教会がそびえていた。

血の跡は教会の扉に続いている。

（あれ、私は、ボクはこの場所を……知っている）

「なんだ…ろう、何だか悲しい夢…」

リンデは目が覚める。

目には涙が零れていた。

いつの間にかベットに横たわっていた。

「リンデ！目が覚めたのか！」

ベットの横の椅子に腰掛けていたアデルが声をかけてくる。

リンデはアデルを呆然と見る。

しばらくして目が潤み始めてくる。

「どうした、どこか痛いところがあるのか？」

アデルが心配そうにリンデの顔をのぞき込む。

「アデルうううう！！」

「うおおおお！！」

リンデはベットからタックルするかのようにアデルの胸に飛び込み、アデルは突然のことに身構えることができず、椅子ごとひっくり返るのだった。

「ありがとう！助けてくれて、ほんとうに怖かったんだからね！」

「いたたっ、そ、そうだな、間に合って良かったよ…」

胸で泣きじゃくるリンデの髪を撫で、無事を祝いながらもアデルの思考は別にあった。

（あの時のことを覚えていないのか？）

血にまみれ、獲物を見るかのような目で自分を見つめていた深紅の瞳。

だが、今のリンデは澄み切った蒼い瞳。

瓦礫で見つかった真っ二つになり、片腕と翼がもぎ取られていた無惨な天使の死体。

あの天使を惨殺したのは間違えなくリンデ。

だが、リンデは覚えていない。

（それどころか俺が助けたと思っている。まるで都合の良いように記憶を改竄したかのように…）

“あの”リンデはリンデではない。

凶悪な何者かの意志によるものだろう。

だったら何の目的で？

アデルはリンデを見つめる。

「アデルう、アデルう…」

自分に心を開き慕っている無邪気な少女。

（やめよう、今はただリンデの無事を喜ぶんだ…）

「いい加減に泣き止め、安心しろ、お前は必ず俺が守る！」

「アデル…」

涙に濡れた瞳でアデルを見つめるリンデ。

「お前は俺の掛け替えのない……妹分だ！」

リンデを力強く抱きしめる。

いつになく感情を露わにするアデルにリンデは心臓の鼓動が強くなるのを感じる。

（アデルが私をこんなにも力強く抱きしめてくれるなんて初めて…）

リンデはアデルの広い背中に両手を回した。

（別に妹分でもいい。アデルが私の、ボクの側にいてくれるのなら…）

「ありがとう、アデル。愛してるよ…」

（けど、いつか妹分じゃなくて、女として…私を、ボクを…）

「ずっと側にいてね…」

（だから、私は、ボクはアデルの隣に並べるように強くないといけない）

「言っただろ、お前が一人前になるまでずっと側にいるさ…」

（例え、リンデが邪悪な存在だろうと俺は必ず守ってみせる）

二人はしばらくの間、そのまま抱き合うのだった…。

掛け替えない家族

あの襲撃があって一日が過ぎた。

天使兵の襲撃は思っていたほどの被害は出なかった。

だが…。

『任務は無事に果たすことができた』

ギエルはそう言い、天使兵を皆殺しにして去っていった。

「ギエル、奴の任務はいったい何だったんだ？」

このミッドガルドには三聖者のうち、二人ほども揃っている。

中級天使程度の部隊で攻め落とせないのは周知の事実だったはず。

ダルトスは天使兵の死骸の山を見渡す。

「これでは奴らはただの捨て駒ではないか…」

ダルトスは思い出す。

世界の破滅を願う男のことを。

「これもお前が望むことなのか…」

|
| |

イリアは襲撃時を思い返す。

今まさに天使兵等に引導を渡そうとしたときだった。

突如として空より飛来してきた深紅の針が天使兵等の額を貫き、呆気ない終幕をもたらされたこと。

腑に落ちない。

彼らの目的はミッドガルドの制圧ではない。

他に何か目的があつたはず。

殺された天使兵は隠れ蓑に過ぎない。

必ず何かがあるはず。

「これもあの男の計算の内なのだろうか…」

狡猾で残忍、邪神が現世に降臨したかのような男。

今もなおこの世界を憎んでいるのだろうか…。

「リンデの夢のことも気になるわ…」

濃い霧の森。

血の跡。

パイプオルガン。

「パイプオルガンはあの男が最も好んで演奏していた楽器…」

『リンデはもはやお前達の娘ではない！私のモノだ！』

『リンデの魂には私の全てが刻まれている。決して、決して私の手から逃れられんぞ！決してな！くくくっ…ふはははははははっ！』

『はああ…、愛しいものの全てを壊してやりたい…。この想いは誰にも止められぬ！まずはお前を壊したい！お前も！お前も！お前も！お前も！お前もだ！』

あの時のことは今でも昨日のことのように思い出す。

「私達は貴方から逃れることはできないのか…」

「でも、リンデとアデル君だけは決して…」

|
| |

「お母さん，リンデのことでお話があるのですが…」

アデルはイリアにリンデの夢とあの襲撃時での様子を話さそうとした。

「いいわ，私もアデル君にお話したいと思ってたところなのよ。別の場所に移動するわ」

アデルはイリアについていく。

「ここなら誰も聞き耳を立てないわ」

アデルとイリアは向かい合う。

そして，アデルは襲撃時のリンデの様子を詳細に語っていく。

イリアはただ黙ってアデルの話を聞いていた。

そして，アデルが話し終えたとき，イリアはアデルの手を握りしめ

る。

「アデル君、お願い、リンデを支えてあげて。あの子はそう遠くない未来で必ず過酷な運命に立ち向かうことになるの。おそらく一人では絶えることができない残酷な真実に…」

過酷な運命。

残酷な真実。

おそらくは彼女の中にいる邪悪な存在の真実。

それと彼女の関係。

「言われなくても俺はリンデを守ります。大切な妹分ですからね…」

（そうだ、俺はもう誓ったんだ。リンデが何者であれ、最後まで味方であり続けると…）

「アデル君、君はリンデが何者かを聞かないのね…」

イリアはどこか縋るようにアデルを見つめる。

（そういうところがリンデにそっくりなんだな…）

アデルは心の中で苦笑して、毅然と応える。

「決めましたから、リンデが何者であろうと側に居続けると…」

イリアはアデルを抱きしめる。

ダルトス、イリア、リンデ、アデルは家族一同で夕食を取ることに
なった。

「久しぶりだな、こうやって家族揃って食事を取るのは」

ダルトスはしみじみと言いつつ、嬉しそうな表情をしている。

イリアとダルトスはミッドガルドを収める首長として、多忙である。

こうやって家族揃って食事が取れるのは滅多になかったのだ。

しかし、今回イリアの意向で何とか時間を取り、家族揃っての団欒
ができたのだった。

「本当に久しぶりだよ。今日の食事は特に美味しいよ！」

リンデは食べかすを散らしながらガツガツと平らげていく。

「おい、リンデ。お前な…。もう少し落ち着いて食べろよ…」

アデルは苦笑しつつ、リンデの口元に付いている食べかすを付近で
取っていく。

「まあいいではないか。久しぶりの家族揃っての食事だ。嬉しくな
るのも分かるさ」

ダルトスは本当の兄妹のようなリンデとアデルを見つめながらも丁
寧に食事を取っていく。

「子供はそれぐらいがいいのよ、大人になるとそういうことがなか

なかでなくなるからね」

「そうだぞ、イリアも昔は…むぐぐぐっ！」

イリアは即座にダルトスの口にステーキを突き刺したフォークを突っ込み黙らせる。

「うん！ やっぱ子供の内にしっかりと丁寧に食事をする癖をつけないとね。ね、あ・な・た」

「うぐぐぐっ、もぐおっ！」

イリアはニコニコとしながらダルトスの口内をフォークで抉っている。

「アデル、ボクちゃんと丁寧に食事を取ることにするよ…」

「そうだな、それがいいぞ、リンデ…」

アデルとリンデはイリアとダルトスのやりとりを見て、しみじみと思った。

「当たり前のことだが、こうやって家族で食事することは素晴らしいものだ…」

ダルトスは掛け替えのないものを前にしたような口振りで言う。

「そうだよ！ 家族で食事は楽しいものだ！ だから、お父さん、お母さん、これからもっと多く一緒に食べようよ！」

リンデはアデルと一緒にになって以来、寂しい思いが少なくなったが、それでも両親との触れあいには飢えていたのだ。

「そうね、毎日が家族揃って食事が出来るようになれたら…」

イリアはどこか悲しげに言う。

今は乱世の時。

いつ幸せな時に終わりが来るかは分からない。

「きっと、そういう時代が来るさ、そのために私達はやってきているのだ」

「そうね、その日のために私達は頑張ってるもの…」

「ボクはそんな日が来ると信じてるよ…」

ガツガツと食事を取っていたリンデが突如話に加わってくる。

「リンデ…」

「だって、お父さんとお母さんは里のみんなのために一生懸命に頑張ってるんだがら…」

アデルはリンデを見て微笑み、食べかすをふき取っていく。

「不思議だ。リンデにそう言われると本当に実現しそうだと思うよ…」

「そうね、愛する家族のために私達は頑張っていけるわ…」

アデルはうなずき、手を叩く。

「暗い話は終わりにして、楽しく食事をしましょう。お父さん、お母さん……」

「アデルの言うとおりだよ！」

「そうね、今夜はたっぷり楽しみましょう」

「リンデ、油断していると父さんが肉を全部食べてしまうぞ」

「ああっ！お父さん、それボクの！」

「はいはい、まだまだありますからね」

こうして食事時間が過ぎていく。

これが家族揃っての最後の食事だと、まだ誰も知らなかった。

――――

ミッドガルドを上空から眺める者が一人。

「どうか、最後の晩餐を楽しんでくださいね…」

彼の名はギエル、天使兵襲撃の首謀者である。

「もうすぐであの棺が開かれる。だが、その前に英雄殿に気づかれる可能性がありますね」

ギエルは翼を広げる。

血よりも紅い黄昏の翼。

隊長に頂きし、破滅へと誘う翼。

「さあ、黄昏の芽よ！産声を上げよ！今宵に大地を深紅に染め上げるのだ！」

ギエルの声は虚空に響き渡る。

そして、その声に応える者はいた。

それは襲撃時にギエルによって虐殺された天使兵の死体。

いや、正確には天使兵の額を貫いている深紅の針。

針は心臓のような鼓動が響き、天使兵の額に根付いていく。

「完全に根付くまで多少時間がかかりますか。まあ、そのときまで最後の夜を楽しんでくださいね…」

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

「今日は一緒に寝ようよ、アデル」

リンデは枕を持ってアデルの寝室に来ていた。

「今日は、じゃなくて今日も、だろ…」

アデルは布団を上げ、リンデを迎え入れる。

「今日は辛いこともあったけど、それ以上に楽しかったよ…」

リンデはアデルにくつつくように横たわり、顔の半分を布団に埋めていく。

「そうだな、どんな辛いことがあっても家族がいれば、帰る場所があれば何だって耐えられるものだな」

アデルの实の両親は天使と悪魔、いわゆる堕天使だった。

父〈アルタイル〉は上級天使に所属する天上界での上級幹部だったが、ダルトスと同様に大天使法院との確執により天上界を去ることになった。

天上界での居場所を無くし、魔界に迷い込んだときにであったのが魔界に墜とされ、堕天使となり、魔界での悪魔大貴族として君臨していた母〈ネレイス〉だった。

最初、二人は反発しあっていたが、いつしか愛し合うようになる。

彼らは三聖者とも懇意であり、第二次聖戦ではゲリラ方面で人類軍を支えてきた英雄でもあった。

だが、天使軍の前線指揮官である〈双翼〉の一人〈ウルキヌス〉によってゲリラ部隊は殲滅され、アルタイルとネレイスは命を落としたのだった。

死地に向かう直前に夫婦となったダルトスとイリアに預けたのが、二人の間から産まれたアデルだった。

アデルは天使と墮天使の間で産まれたことでの突然変異なのか、絶大なる潜在能力を秘めていた。

その力は上級天使や悪魔大貴族を凌ぐほどであった。

当然、周囲からその力ゆえに蔑まされ、忌み嫌われていた。

だが、そんなアデルをダルトスとイリアは本当の息子のように愛してくれた。

だから、アデルもまたダルトスとイリアを第二の両親として慕い愛した。

そして、二人の娘のリンデ。

彼女はアデル以上の特殊な力を有する異種。

ダルトスとイリアは彼女が二人の娘であること以外は話そうとはしなかった。

それでも両親はリンデとアデルを分け隔て無く愛した。

その真実だけでアデルには十分だった。

「暖かいね、アデル」

「ああ、そうだなリンデ」

二人は布団の中で向かい合う。

「ずっと一緒だよ，アデル」

「側にいるさ，リンデ」

二人は抱き合い，眠りにつくのだった。

屍天使の狂宴

濃い霧の森にそびえたつ古びた教会。

血の跡は扉の中に続いている。

そして、パイプオルガンの音色。

少女を誘うように扉が開かれていく。

そこにはいたのは…。

「お祈りに来たのかな？ お嬢さん…」

血塗れた姿でパイプオルガンを演奏する男。

「間もなく終わり無き悪夢が開幕するだろう」

少女は教会の中で歩みを止める。

「さあ時間だよ。リンデ・エスカレーネ」

男はパイプオルガンの演奏を止め、リンデの方へと顔を向けようとする。

そして、夢は途切れる。

ふとアデルは目が覚める。

側には虚ろな目で起き上がっているリンデがいた。

「リンデ？」

リンデはアデルの呼びかけに応えること無く虚空を見つめていた。

（まさか、また…）

アデルはあの血まみれとなり、狂気に満ちたリンデを思い出す。

「逃げて…もうすぐ…あの男が…来る…」

静かで儚げな声でアデルに告げるリンデの姿をした“少女”。

「お前は何なんだ？」

「“私”はリンデ…」

「お前は俺が知っているリンデじゃない！お前はいつたい…」

どごおおおん！

突然鳴り響く爆撃音。

アデルは窓から爆音が響いた方向を見る。

煙が上がっていた。

「リンデ！」

「何！さっきの音は？」

「リンデなのか？」

「えっ？
“ボク”
はリンデだよ」

リンデは起き上がり、服を着替えようとする。

「なんか悪い予感がする、外出よう、アデル」

「分かった」

アデルはリンデが目の前で着替える姿が見えたが、スルーする。

緊急事態なので気にする余地が無い。

リンデとアデルは煙がたつ方向へと走っていくのだった。

[illegible]

「やはり仕掛けてきたか、念のため、兵を編成して正解だったな」

「ええ、でも…」

ダルトス、イリアとその部隊は目の前の光景に戦慄していた。

「ぐええええあああ…」

「ぐふうぐいええはあああああ！」

呪いのような喘ぎ声を発しているのは先日襲撃し、ギエルによって殺されたはずの天使兵だったからだ。

天使兵の額には心臓のように脈打っている深紅の針が突き刺されていた。

「まさか、これがギエルの狙いだったわけか…」

ダルトスは歯がみし、エーテルソードを手に持った。

「これもあの男の差し金というやつね、全く反吐がでるわね…」

イリアは嫌悪感を露わにし、エーテルウィップを出す。

「うがああああっ！」

「…っ！」

天使兵だったモノは生前とは比較にならないほどの凄まじい速度で突進してくる。

「ちっ！」

イリアは鞭で薙ぎ払おうとするが、天使兵ゾンビは驚異的な早さで回避し、背後に回り、腕を振るってくる。

イリアは天使兵ゾンビの攻撃を回避し、鞭を払って胴薙ぎにしている。

「こいつ等、強い…」

「ああ、油断してるとやられるぞ…」

天使兵ゾンビは両手を前方に向けてくる。

「何をするつもりだ？」

里の兵士が武器を構える。

ダルトスはふと天使兵ゾンビの手から凄まじい殺気を感じ、回避を呼びかける。

「避けるっ！」

「え」

ずぼっ！

兵士達の胸にいつの間にか、深紅の触手が貫いていた。

天使兵ゾンビの指先から放たれたものだった。

「ぐへっぐへうああははははあああ！」

さらに口から閃光を放出し、兵士達を次々と貫いていく。

「くっ！散開しろ！一カ所にとどまるな！」

ダルトスはエーテル弾を放ち、天使兵ゾンビを次々と粉碎していくが、数匹は回避し、全身から触手を放出してくる。

里の戦士達は第二次聖戦開始時から戦場を渡り抜いてきた歴戦の古強者で揃っていた。

しかし…。

「げいあああいやややや！」

獣のような叫声を上げながら、天使らしからぬグロテスクな攻撃をしてくる天使兵に驚愕していた。

しかも、上級天使には及ばないものの、凄まじい戦闘力を誇っていた。

四肢を切断しようとも内蔵が飛び散ろうともかまわず天使兵は突進してくる。

「ぎゃああああ！」

天使兵が里の兵士ののど笛を噛みちぎり、鮮血の雨を降らせていた。

全身を触手で貫かれ、絶命する兵士。

「総員、炎属性のエーテルを発動しなさい！」

イリアは天使兵をゾンビを始末すると同様に焼却することにした。

「ファイアストーム！放てえええ！」

家一軒を飲み込むぐらいの業火の竜巻が天使兵ゾンビを包み込む。

「あぎゅえああああああ！」

狂おしいほどの絶叫を上げていく天使兵ゾンビ。

「悪趣味なことをする。悪魔の方がまだ弁えているものだ」

ダルトスは襲いかかる天使兵の頭部、すなわち深紅の針が突き刺さっている所を破碎しながら舌打ちする。

死してなおも戦場で肉体を腐らせながら戦わされる天使兵に憐憫を感じた。

「せめてもの慈悲だ。肉片一つ残さず、浄化してあげよう」

ダルトスは膨大なエーテルを収束していく。

天使兵ゾンビもまた一斉にホーリーアローの射撃準備をしていた。

「消え去れ！セイントバースト！」

巨大なエーテル弾が放たれる。

「ぐう　おお　おお　おお　ああ　ああ　ああ　ああ！」

雪崩のようにホーリーアローが降り注いでくる。

凄まじい爆音が戦場を席卷する。

[illegible]

「こっちだ！ リンデ！」

「わかってるよ！ アデル！」

リンデとアデルは煙がたつ方向に向かっていた。

どごおおおん！

「ぎえええええあああああ！」

狂おしい咆吼と爆音が二重奏となって里に響く。

「また天使の襲撃なのか？」

「アデル！天使兵だ！」

リンデの呼びかける方向に視線を向けるアデル。

涎を垂らし、虚ろな目で近づいてくる天使兵。

額には深紅の針が突き刺さっていた。

「此奴等、ゾンビなのか？」

「だったら、火属性のエーテルで浄化しよう！」

リンデはエーテルを集中させ、剣に純白の炎を宿す。

「はああああ！」

リンデは裂帛の気合いと共に炎を纏った剣を振りかぶり、天使兵を両断していく。

「てえやああああ！」

さらにすぐさま背後から来る天使兵を胴尻ぎにしていく。

リンデは天使兵を屠りながらも自分の動きに驚嘆していた。

（ボクって、こんなに早く動けたっけ？）

斬りつけられた天使兵は燃えさかり、あっという間に灰になっていく。

アデルもまたリンデの身のこなしには驚いていたが、気を取り直し剣に炎を纏わせる。

アデルは知っていた。

血塗れた姿で自分の翼を求めているリンデを。

そして、彼女が〈翼喰らい〉で天使兵の翼を喰らったことを…。

翼を喰らったことで戦闘力が上昇したのだろう。

（今は目の前の驚異を取り除くことが先決だな…）

アデルは圧倒的な速度で天使兵を斬っていく。

アデルの剣術はダルトスのお墨付きである。

彼に敵う者は里の中ではそういない。

「やっぱり強いね、アデルは。けど、ボクも負けない！」

リンデは懸命にアデルの強さに追いつこうと天使兵を斬っていく。

リンデには戦への恐怖は無かった。

敵を殺すことにも躊躇いが無いのだ。

初陣のはずなのに…。

アデルは初めてリンデに少し恐怖を感じた。

そのとき油断が生じたのか、天使兵の触手がアデルの肩を掠ってしまった。

「ちっ！油断したか…」

（通常の天使兵よりも遙かに手強い、早くお父さんに合流しないと…）

「げえああああ！」

天使兵等は体中から生えている触手の先端からエーテル弾を大量に撃ち出してくる。

「アデルっ！」

今まで冷静に天使兵を斬り捨てていたリンデに初めて焦りを感じさせる声で呼ばれる。

「心配するな」

エーテル弾の嵐をかいくぐりながらもリンデに笑顔を向けて天使兵を蹴いでいく。

「お前は先に父さんの所に行け！」

「でも…」

リンデはアデルの方へと駆けつけようとするが、それを阻むように天使兵が群がってくる。

「くそっ！どけよ！」

リンデは天使兵を斬り捨てようと剣を振るが、受け止められてしまう。

「えっ」

天使兵はリンデの動きを見切ったかのように剣を受け止め反撃しようとしてくる。

アデルの方に注意を向けていたためか、天使兵の力を侮ったためか、リンデは呆然と天使兵の刃が近づいてくるのをただ見ていた。

「リンデええええ！」

ざしゅっ！

リンデの顔に血がこびり付いていた。

この血は…。

リンデに寄りかかるように倒れているアデル。

その背中からは血が流れていた。

「アデルうううううっつ！」

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

「はははははははっ！これこそ地獄絵図というやつですかねえ」

ギエルは上空から炎上しているミッドガルドを見て高らかに笑う。

「さてと、そろそろだ」

屍天使はダルトス等の目を欺けるための囷にしか過ぎない。

本当の目的は天使兵に運び込ませ、ミッドガルドの地中に埋めた“棺”だった。

「さあ、暴虐なる天使よ、目覚めよ！そして、殺し尽くせ！破滅の始まりだ！」

[illegible]

「グウウ……」

ミッドガルドの地中に埋められた棺が動き出し、天使の髪で編まれた縄が千切れていく。

「グウオオアアアアア……」

暴虐なる天使は身体機能が正常に起動することを認識する。

『サア、目覚メルノダ、
へタルス』ヨ……』

創造主の聲に導かれ凶天使が目覚める。

「グオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアア！」

凶天使の咆吼がミッドガルド全土に響き渡るのだった。

終わり無き悪夢の開幕

突如くる凄まじいプレッシャーをダルトスとイリアは感じ取った。

「なんて暴悪なエーテル反応なんだ…」

ダルトスの額から汗が流れ出る。

戦場で冷や汗をかくのは双翼の一人、ウルキヌスと対峙した時以来だった。

上級天使と同等か、それ以上の戦闘力を持つ天使が直にやってくる。

「ダルトス！」

イリアもまた同じことを思っているのだろう。

目の前には群がってくる天使兵ゾンビ。

（早めに決着を着けなければ…）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

「アデル！アデル！しっかりしてよ！」

リンデの手がアデルが流す血に染まっていく。

「ぐっへんぐっへんぐっへんぐっへんぐっへん！」

天使兵ゾンビは取り乱しているリンデをあざ笑うかのような声を出しながら徐々に包囲してくる。

[illegible]

リンデはアデルをそつと地面に横たわらせ、音をたてることなく立ち上がり、包囲している天使兵ゾンビを見渡す。

その目は焦点が合ってなかった。

「くっ！俺はいたい…」

アデルは目を覚ます。

どうやらリンデを庇う際に受けた攻撃で気絶していたようだ。

ふと自分の目の前で背を向けて立っているリンデを見る。

その背中には悲哀とも憎悪とも取れる負の感情が漲っているように見えた。

「消えろ…」

リンデの抑揚の無い声がアデルの耳に鮮明に響く。

「リンデ、やめろ…」

アデルが呼びかけるが、今のリンデには届かない。

「お前らみんな、みんなボクの前から消え失せろおおお」

リンデの体が青白く輝き出し、光が広がっていく。

「ぎえああああええええああええええあ！」

光に触れた天使兵等は燃えさかり、灰となって散っていく。

光はやがて、巨大な柱となり、天を突き抜けていく。

光の柱は以前よりも強化されたイージスの盾を貫通し、破壊していたのだった。

予定ではタルスが内側からエーテル波を放射して破壊させることだったが…。

「これは良い意味での誤算ですね、さて、いよいよ本隊に来ていただきましょうかねえ…」

ギエルは手から鳥を召還して飛ばせるのだった。

「いよいよ地獄の始まりですね、ふはははははははっ！」

ダルトスとイリアは光の柱を見て、咄然としていた。

光の柱を天を突き抜け、イージスの盾を消滅させてしまっていた。

「このエーテルはリンデ、リンデがやったというのか…」

「あなた！リンデとアデル君の所に行きましょう、何か凄く嫌な予感がするの！」

群がる天使兵を薙ぎ払いながらイリアは焦燥感に満ちた声を出す。

「そうだな、此奴等を蹴散らして、リンデとアデルの元へと急ぐぞ！」

ダルトスが最後に残った天使兵を斬り捨てて、駆けようとした矢先だった。

「この強大なエーテルは！みんな！その場から離れろっ！」

「いったい次はなん…」

ダルトスが率いていた兵士の一人が何か言おうとしたとき、いきなり視界が真っ白になった。

目映うほどの閃光が天から降り注いできたのだ。

閃光を浴びた兵士達は塵も残らず消滅していく。

「何なんですか、このデタラメなエーテル力は！」

「双翼が出向いてきたんですか！」

「それにイージスの盾が…」

兵士達は恐慌状態に陥っていた。

「静まれっ！」

ダルトスは怒気をもって兵士達に呼びかける。

「落ち着くんだ！まずは目の前の状況を受け入れろ！この前の襲撃といい、今までの天使軍とは違うことは確認済みのはずだ！」

以前の襲撃時では容易く結界を破られ、率いていた天使兵を一瞬にして皆殺しにした天使がいたこと。

「奴は少なくとも上級天使と同等あるいはそれ以上の力を持った天使だった。それに奴自身は『隊長の部下の一人』だとも言っていた。おそらく天使軍が極秘に編成していた特殊部隊か何かだろう…」

「いわば上級天使で構成された超精鋭部隊ということなのね…」

ダルトスとイリアは淡々としかし、重苦しく言うのだった。

「そんな！だったら双翼以上に厄介な存在じゃないですか！その上級天使は稀少のはずなんでは…」

「それは私にも分からない。そもそも私が離れてからというもの、天使軍の編成が変わってきたわけだからな。双翼という上級天使が現れ、その片割れは顔を合わせたことすらもない」

そう、双翼すらもダルトスが在軍していたときには存在していなかったのだ。

（私が離れて以来、何者かの意志により天使軍は動かされている。いや、今はそれよりも…）

イリアはすでに戦闘態勢を取っていた。

その視線の先には筋骨隆々とした天使が鈍器のような剣を携え、悠然と立っていたのだ。

「隊長の命令…雑兵は…殲滅…する…」

その天使が剣を振った瞬間、兵士達の上半身が弾け飛び、鮮血が吹き荒れた。

ダルトスは舌打ちして天使の方向へと走っていく。

「総員退却し、イリアの指揮に従っていけ！ここは私が殿を務める！」

天使が振り下ろそうとした剣を受け止めるダルトス。

ダルトスを中心に地面が陥没し、クレーターが出来てくる。

「この馬鹿力め！」

ダルトスは天使の剣を弾き、横風ぎを繰り出す。

だが、天使は驚異的な跳躍でダルトスの剣を避け、距離を離して見据えてくる。

「今だ！みんな行け！」

イリア率いる部隊は光の柱の元へと走っていく。

「あなた！無事でいて…」

「ああ、生きて逢おう！」

ダルトスはイリアを見送り、天使の方に向く。

「俺の名…タルス、お前…強いな…」

ダルトスは笑みを浮かべて剣を構える。

「戦闘狂ということか、タルスといったな。ならばこちらも名乗ろう。三聖者の一人にして、このミッドガルドの首長であるダルトス・エスカレーネだ。故郷を守るため、お前を浄化する！」

ダルトスとタルスのエーテルソードがぶつかり合う。

ダルトスは顔をしかめタルスの剣と打ち合っていく。

スピードはダルトスに分があった。

だが、パワーはタルスが圧倒的だった。

（このタルスという天使、強い、だが…）

タルスの攻撃はひたすら剣を打ち付けていくだけの単調な攻撃だった。

ダルトスは剣速に緩急を付け、さらにフェイントを織り交ぜて攻撃を繰り返していた。

（まるで子供だ、攻撃が単純過ぎる。だが…）

ダルトスがフェイントをかけた後に繰り返す斬撃をタルスは驚異的な反射神経で回避し、反撃をしてくる。

いや、攻撃を読んでいたかのように回避しているようにも見えた。

（技術が無い分、本能と勘で補って余りあるというわけか…）

ダルトスの強さに歓喜したのか、タルスは舌なめずりして殺気をさらに出してくる。

「お前と…戦う…面白い…くっくくく…」

「厄介な奴に気に入られたものだな…」

両者は再び剣を交えていった。

|
| |

「くっ！もういい，もう止めるんだ，リンデ！」

アデルは傷をエーテルで癒しながら，光を放つリンデに近づいていく。

光は天使兵を焼き尽くしていたが，アデルを焼き尽くしてはいなかった。

アデルは苦笑する。

リンデは怒りで我を忘れても，自分のことを想っていてくれている。

アデルはリンデを後ろから抱きしめる。

「もういいんだ、リンデ。俺はここにいる。俺はお前の側にいる。だから落ち着け…」

リンデの体から光が消え始めていく。

「ア……デ……ル……」

リンデはアデルの存在に気づいたかのように後ろに振り向きアデルの顔を見る。

「本当にお前は俺がいないとダメだな…」

リンデは顔をくしゃつとし、アデルの胸にしがみつく。

「ほん…とうだね。ボク、アデルがいないとダメなんだよ…」

アデルはリンデの頭を撫でる。

「今はまだいい。俺が側にいてやるからな、けど、いつかは…」

ふと気づく。

リンデの体から力が抜け、アデルに寄りかかっているのを。

「フッ、全く…」

アデルは寝ているリンデを背負うとしたとき、エーテル反応が接近

してくるのを感じる。

このエーテル反応は…。

「リンデ！ アデル君！」

接近してきたのはイリアのエーテル反応だった。

アデルは安堵したかのように膝を地につける。

[illegible]

「そろそろご到着になれるかな…」

ギエルは未だに上空から戦場を静観していた。

だが、この退屈な時間もこれで終わりとなる。

ギエルの周囲の空間が歪みが生じてくる。

その瞬間、空気が震え、空が黄昏の色に染まってくるのだった。

空間の歪みが次々と起こり、それに呼応するかのように嵐が吹き荒れてくる。

そして、空間の歪みから全身白の鎧に包まれた者が現れる。

それに続くように他の空間の歪みからも同様に白い鎧を着た者が出てくる。

ギエルは現れた者と同様に白い鎧を召還し、身につけ、跪くのだった。

「任務完了致しました。隊長殿…」

白い鎧に包まれた者達の中で角を伸ばした兜を被っている者がギエルの前に立つ。

「ご苦労、ギエル。早速だが報告を」

「はっ！現在、ミッドガルドで私が仕込んだ屍天使等がダルトス様、イリア様率いる部隊と交戦中。そして、間もなく屍天使の部隊は殲滅されることになるでしょう。ここまでは隊長殿の計画通りであり

ましたが…」

「何かトラブルがあったのか？」

ギエルは少し躊躇し、報告を続ける。

「はっ！隊長殿が立てた計画通り、タルスとダルトス様が激突された際に発するエーテルの余波によりイージスの盾を無力化する予定でありましたが、正体不明の光の柱が発生し、それによりイージスの盾が破られました。その光の柱は途轍もないエーテルの力を秘めており、上級天使と同等かそれ以上のものと見受けました。……おそらくですが、隊長殿が求めるモノの力かと…」

隊長はギエルの報告を黙って聞いていたが、やがて肩を震わし、笑い出すのだった。

「ふははははははっ！そうか！まさかもうイージスの盾を貫くほどの力を持つとはな。くっくくくっ…」

「隊長殿…」

隊長はしばらく笑った後、戦場を静かに見渡していった。

「よくやったぞ！ギエル。さて、今日はとても気分がいい。総員出撃準備！」

「「はっ！」」

隊長とその兵士達は兜により、表情は見えないが、戦場を見渡し、歓喜に震えている雰囲気だった。

[illegible]

隊長の号令に呼応し、一斉に降下していく。

「くっくくくく、さてと懐かしの教え子の元へと行くとするか…」

「ダルトス、イリア、お前達はここで退場してもらおうか……」

127

「よかった無事だったのね、リンデ、アデル君…」

イリアは合流したリンデとアデルを抱きしめるのだった。

「お母さん、この天使兵のゾンビはいつたい？」

「話は後よ！それよりも早くこのミッドガルドから離れた方がいいわ！」

アデルの疑問に応えることなく必死の形相でイリアはアデルを見る。

「いったい、どういうことですか？」

イリアは故郷であるミッドガルドを放棄することを言っているのだ。

さすがにアデルはそのことまでは聞かずにはいられなかった。

「ごめんなさい、よく分からないけど、ものすごく嫌な感じがするの…」

「嫌な感じ？つまり勘…ですか？」

「そうよ！勘よ！」

イリアはアデルの疑問に決然と頷く。

イリアの勘、三聖者として長きに渡り戦場を駆けめぐってきた英雄がいう勘。

これをただの勘として有耶無耶にすることはできないだろう。

それにイリアの言うことにはいつも間違えは無かったのだ。

アデルはイリアの言葉に従うことにする。

「分かりました、逃走経路は？」

「ありがとう、信じてくれて。まずは…」

突如、イリアとアデルに凍えるような威圧感が襲ってくる。

「何なのこれは？」

イリアは驚愕する。

かつてこれほどまでに凄まじい威圧感があっただろうか。

いや、一人だけ、これほどの威圧感を出す者をイリアは知っていた。

「大気が震えている…」

アデルはただ呆然としていた。

そのとき、ミッドガルドの空から隕石が降り注いできた。

「違う！あれは…」

禍々しい深紅のエーテルを体に纏いながら降下してくる天使兵だった。

「何なの？ いったい…」

アデルの腕の中で眠っていたリンデが目覚めます。

ミッドガルド全域に及ぶ強大な威圧感に当てられて目覚めたのだろうか。

隕石もとい天使の一体が自分たちの元へと近づいてくるのをイリアは気づき、シールドを展開させる。

「みんな、伏せて！」

里の兵士達は地面に伏せ、アデルはリンデを庇うように伏せていく。

どごおおおおおん！

「くっ！」

隕石が落ちたときの衝撃はイリアのシールドをも貫き、イリアの部隊は弾き飛ばされていく。

「なんて力なの…」

イリアは自分が展開したシールドが容易く破られたことに啞然とし、周囲を見渡す。

周囲は砂塵に満ちていて、視界を遮っていた。

「みんな、無事なの!？」

「俺は大丈夫です、リンデも」

アデルの声がし、無事を確認できたことに安堵するイリア。

だが、迫り来る威圧感に周囲を警戒するのだった。

ふと足音が響いていた。

その足音が一步一步と近づくと共に威圧感が大きくなってくる。

イリアは足音が聞こえる方向に体を向ける。

砂塵が消え、純白の鎧を身に纏った者が姿を現す。

その者の兜には角が伸びていた。

「とうとう来たのね…」

イリアは憎しみとも悲しみとも取れる声を白い鎧の男にかける。

「久しいな、イリアよ…」

[illegible]

リンデはアデルの腕の中でイリアと対峙している白い鎧の男を見ていた。

どこかで会ったことがあるような酷く懐かしい感じがしていた。

『間もなく終わり無き悪夢が開幕するだろう』

「くっ！」

頭がズキズキする。

「どうしたんだ、リンデ！」

アデルはリンデを心配げに見る。

「だいじょうぶ、何でもない……」

『さあ時間だよ。リンデ・エスカレーネ』

なぜ、ここで夢のことを思い出すのだろう。

リンデは何となく感じた。

あの男は自分の運命の前に立ちはだかる最凶の敵であると。

イリア・エスカレーネ

「此奴等，新手の天使兵なのか？」

「とにかく奴らが敵であることに変わりない。応戦するぞ！」

里の兵士は突如現れた全身を白で纏った敵兵に戸惑いながらも里を守るため戦おうと士気を上げた。

「お前達，なぜ我等が白で身を固めているか理解できるか？」

白の兵士が戦おうと意気込んでいる里の兵士に声をかける。

「何を言いたい？」

里の兵士達は身構える。

気を持たないと白の兵士の粘つくような殺気に嘔吐しそうだった。

「答えは……こういうことだ」

里の兵士の一人は突然目の前にいた白の兵士に反応が出来なかった。

それに妙に胸元が熱い。

胸の方を見ると白の兵士の腕がめり込んでいるのが分かる。

白の兵士の抜き手で胸を貫かれたのだった。

「がほっ！」

里の兵士の吐血により、白の兵士の兜が紅く染まっていく。

里の兵士は驚愕する。

敵は視認できない速さで接近し、エンジンウムで身を固めた兵士を素手で貫いてみせたのだ。

実力からして上級天使並であった。

「これがダルトス様が言われた天使軍が極秘で編成していたという特殊部隊なのか……」

里の皆が異種としての能力を発揮し、炎、冷氣、雷等の力を敵兵に放っていく。

だが、敵兵はそれら全てを素手で弾き、さらには応えないとばかりにその身に受けつつも突撃してくるのだった。

「これがあの三聖者が率いる部隊というのか！ 温いぞ！」

エーテルソードで里の兵士を纏めて凧ぎ払い、鮮血をその身に浴びながらも嘲笑する白の兵士。

いや、白の兵士とはもう呼べなかった。

なぜならば、返り血を浴び、白い鎧や翼は深紅に染まっていた。

ミッドガルドはもはや里の者の悲鳴が響くばかりだった。

「何が目的なの？」

イリアは毅然として、目の前にいる白の兵士に問いかける。

「簡単なことだ、お前とダルトスの死、それだけだ」

「シンプルな返答ありがとう…」

イリアは白い兵士の至極単純な返答に苦笑する。

いつの間にか周囲が炎上していた。

そして、かすかだが、声も聞こえていた。

聞こえたのは悲鳴。

それも里の住民の悲鳴。

「フフフツ…」

ミッドガルド全域に響く悲鳴に白い兵士は微笑する。

「何がおかしい？」

「イリアよ、お前は夢に見たことはないのか？ 平和な日々がいつか絶望に彩られ、全てを失う光景を…」

イリアは白い兵士の言葉に動揺する。

そうだ、自分はいつも平和な日々が壊れてしまうのではないかとどこかおびえ続けていた。

ダルトスとアデル君、それと里のみんなといつまでも平和に過ごしていきたい、それがイリアにとって何よりも優先されることだった。

「私はいつも夢に見ていたよ。お前達の幸せを壊し、全てを奪う喜びをな…」

男は憎悪とも歓喜とも取れる言葉を淡々と言い、近づき、イリアは後ずさっていく。

怖い。

イリアは戦場で初めて逃げ出したい気持ちに駆られる。

自分ではこの男に決して敵わない。

けど…。

イリアは後ろを振り向き、リンデとアデルを見る。

そこには自分の守るべき存在がいる。

「アデル君、リンデを頼むわね…」

アデルは無言で頷く。

「お母さんは、お母さんはどうするの？」

リンデはイリアに呼びかける。

リンデにはイリアがこれから何をするのか予想はついていた。

それでも呼びかけずにはいられない。

イリアとはもうこれで…。

「ごめんね、私はあの男に用事があるの。だからリンデはアデル君と一緒に、ね…」

「嫌だよ！お母さんも一緒に！彼奴はお母さんでもきつと…」

そう、イリアでもあの男に敵わない。

リンデは直感でそう思った。

イリアはリンデに近づいていく。

男は動こうとしなかった。

最後の別れぐらい待っていてくれるのだろうか。

「私は貴方達のお母さんなのよ、母はね、子を全力で守るものなのよ…」

「お母さん…」

イリアはそつとリンデとアデルを抱きしめる。

「私にとって最上の幸せはダルトスを夫に出来たことと貴方達の親になれたことよ…」

イリアはアデルを見つめる。

「アデル君，リンデを頼むわね…」

「分かりました，リンデは俺の大切な妹分ですから」

アデルの返答にイリアは相変わらずね，と言って苦笑する。

「アデル君，いえアデル，私は貴方を本当の息子として愛してたわ，それに男としてもね…」

イリアはアデルの頭を抱き寄せ，アデルの唇に自分のそれを重ねる。

「お，お母さん…」

アデルはもちろんのこと，リンデも啞然としてイリアを見た。

「ふふっ，浮気しちゃったわ。もちろん一番はダルトスよ。私って実はハーレム思考があったのよね。けど，同じ家族なんだし，アデルだったらダルトスも許してくれると思うし。それにアデルにとっても私では一番になれないしね…」

イリアは意味ありげにリンデの方を見る。

それに対してアデルは顔を赤くする。

「いくらお母さんでもアデルは…」

イリアはリンデの口に指を当てて黙らせる。

「分かっているわ。リンデのって一番の人なんだからね。そうだ、今度また家族全員で食事パーティでもしましょ。そして家族揃って一つのベットで寝るの。とっても気持ちいいと思うわ…」

イリアは楽しげにそしてどこか悲しげに語り、リンデを抱きしめる。

「リンデ、強く生きなさい。例えどれほどの過酷な運命が待ち受けても受け入れ乗り越えるのよ」

「おかあさん…」

リンデは涙を流していた。

おそらくこれが今生の別れになることを察したのだろう。

イリアはリンデの涙をそっと指で拭い、笑顔を見せる。

「ごめんね、親として何もしてあげれなくて。けど、心配しないで。私はこう見えても三聖者で人類軍の英雄よ。そう簡単にやられたりはしないわ。だからね、もし帰ってこれたら家族で食事パーティをしましょ、約束ね…」

イリアは抱いていたリンデを離すとアデルに預ける。

「さあ、行きなさい！」

アデルはリンデの腕を引っ張り走り去っていく。

「お母さん！おかああさん！……」

リンデの声が遠ざかっていく。

「リンデ、アデル、強く生きて……」

遠ざかっていく二人にそう呟き、前を向く。

白い兵士が悠然と佇んでいた。

「別れは済んだのか……」

「ええ、ありがとう、待っていてくれて」

イリアは感謝を述べ、エーテル力を解放する。

その力は大地を揺るがすほど強大だった。

この男相手に出し惜しみは一切しない。

命と引き替えても、この男だけは……。

（大切な者を守るために！）

イリアはエーテルを放出し、上空へと飛翔する。

地上で戦えば、味方を巻き込んでしまうからだ。

「礼には及ばない。雑念を抱えた獲物を捌っても面白くないからな」
男もまたエーテル力を解放する。

同じく大地が軋み、空間に歪みが出るほどの力だ。

男もまたイリアを追うように翼を広げ、空へと飛ぶ。

「フフフツ、味方を巻き込みたくない、というわけか。どうせ何もかも消えて無くなるというものを…」

「その前に貴方を倒すわ。私の全てを賭けて！」

イリアの強大なエーテルに呼応するかのように嵐が吹き荒れてくる。

その嵐の中、男は涼しげにあるいは心地よさげにしていた。

「お前が私を倒す？本気で言っているか。お前に戦い方を教えたのは誰か忘れたか…」

男の余裕にイリアも不敵な笑みで返す。

「親はね、子の命を守るために何倍もの力を発揮するものなのよ、お分かり？」

「なるほど、英雄であるよりも親であることを選ぶのか、それも良かろう」

両者は互いに見据える。

「私は貴方に感謝している。私に戦い方を教えてくれて、リンデを助けてくれて……。でも、もう失うわけにはいかないのだ。かつてへ四聖者」と呼ばれたときに私やダルトス、レイアを導いてくれた貴方であろうとも！」

イリアは裁きの女神と呼ばれていた頃の口調となり、周囲に複数の魔法陣を展開させる。

その様子を見て、男は笑う。

「分割思考による複数の術式展開か、さすがは人類軍の魔女と呼ばれるだけはあるな。ならば私も……」

男もまた周囲に魔法陣を大量に出現させていく。

「さあ、殺し合おうか！イリア・エスカレーネよ！」

互いの魔法陣から火、水、雷、氷、土、光、闇等と森羅万象あらゆる属性をエーテルの力となり、激突していく。

ミッドガルドの上空は強大なエーテル同士のぶつかり合いに彩られていた。

イリアは分割思考でもって火には水を、闇には光を、と相反する属性をぶつけて相殺していく。

男はさらに魔法陣を複数展開し、エーテルを放出してくる。

エーテルの弾幕が徐々にイリア側へと押しやられていく。

「どうしたイリア、お前の力はその程度なのか？」

男はあざ笑いながらも魔法陣を次々と出現させ、イリアを追い詰めていく。

（なんというエーテル力！やはり奴の力は底無しだ、だったら“あれ”をするしかない！）

イリアの魔法陣は急にエーテルを放出するのを停止させた。

男が放つ弾幕が一斉にイリアとその魔法陣を飲み込もうと押し寄せてくる。

「どうした、勝負を捨てたのか、イリアよ」

「冗談！私は大切な者を守ると決めたのだ！勝負を捨てることはあり得ぬ！」

イリアの魔法陣が男の放ったエーテルを吸収していた。

男に僅かだが焦りが見えた。

「相手のエーテル力の特性と同調させることで己の力として逆用できる、これは貴方が教えてくれたことだ！」

男のエーテルを吸収した魔法陣は倍加させたエーテルを一斉に放出し、今度は男を飲み込まんとしてくる。

上空に凄まじい爆発が起こり、大気が震えるのだった。

「やったか…」

イリアは肩で息をしながら煙幕に包まれている前方を見据えた。

「さすがだな、複数の術式の特性を瞬時に同調させ逆用するとはな、師匠として嬉しい限りだ」

煙が晴れ、男は悠然と立っていた。

その体には傷一つ無い。

イリアは体の力が抜けそうになる。

複数の術式展開に続き、男が放つエーテルを一身に受けて倍返しをしたのだ。

そのエーテルの消費は計り知れない。

（あれだけの攻撃でもかすり傷一つ負わせられないのか…）

イリアの顔に絶望の色が見せ始めていた。

「良い顔だ、もう疲れただろう。抵抗を止めれば、快楽の果てに痛みを与えず殺してやるぞ…」

イリアの心は絶望に押しつぶされそうになる。

だが…。

ダルトス。

アデル。

そして…。

リンデ。

大切な家族の顔が脳裏に浮かぶ。

「私は…負けるわけには…いかない！」

脱力する体を奮い立たせ、男を睨み付ける。

その目にはまだ絶望が彩られていない。

「あくまで親でいようとするわけか、イリアよ！ならば、受け止めてみるがいい！その想いの力でもってな！」

男の周囲にある多量の魔法陣が収束していき、ミッドガルドを覆うほどの巨大な魔法陣が形成されていくのだった。

魔法陣が向けているのは地上のミッドガルド全域。

「まさか、貴様！」

男の意図に気づき、イリアは唾然とする。

「さあ、イリアよ。お前の大事なものを守らなければ消えてしまう

ぞ、ふははははははっ！」

男の嘲笑と共に巨大な魔法陣は禍々しい深紅の輝きに満ちていく。

「正気なのか！これを放てば、ミッドガルド全土、お前の部下までもが死ぬことになるのだぞ！」

イリアはこの戦略兵器級のエーテルを停止するよう男に呼びかける。

「その心配には及ばない。なぜならばお前がこのエーテルを妨害してくれるからな……」

男は狂気に満ちていた。

これは男にとってゲームに過ぎないのだ。

「さあ、防いでみる。防げたら、このミッドガルドでの戦いに限り、このような規模のエーテルを使わないことを誓おう。なにせ、この力を多発しては戦の面白みにかけてしまうからな」

イリアは再び多量の魔法陣を出現させ、あらゆる属性のエーテルを巨大魔法陣に向かって放出していく。

だが、巨大魔法陣はイリアの放ったエーテルを瞬く間もなく吸収していった。

「……っ！」

「無駄だ、この術式は全てのエーテルの特性を瞬時に解析し、吸収してしまうのだよ。さらに言えば、これほどの規模のエーテルをさ

すがのお前でも吸収しきれまい。さて、どうする？」

悔しいが、確かにこの規模のエーテルを解析できたとしても逆用することは不可能だった。

なぜならば、自分が許容できる容量を遙かに超えてしまうからである。

コップに大海全ての水を収めようとするものだ。

魔法陣はまさしく完全なる戦略兵器だった。

魔法陣の破壊が不可能となれば、術者を倒すのみだが…。

イリアは男を見る。

（だめだ、私ではあの男を倒すことはできない！）

だとすれば…。

イリアは地上に降下する。

そのイリアの行動を見て男は微笑む。

「そう、それしか方法は無いだろうな。果たして凌ぎきれるかな？」

イリアは術式を展開させ、ミッドガルド全域を覆う巨大なシールドを形作る。

「守ってみせる！この命にかえても！」

巨大魔法陣は最大限に輝き出す。

「見せてみる！大切な者を守ろうとする想いの力をな！ジャジメン
ト・レイ！」

巨大魔法陣はミッドガルドを飲み込むかのような膨大なる深紅の波動を放出してくる。

それを堰き止めようとするのがイリアが展開したシールド。

だが、シールドに少しずつ亀裂が走り始めていく。

「はははははっ！どうした！このままではお前の大切な者がこの
ミッドガルドと共に消滅することになるぞ！」

「うぐっ！ううっ…」

イリアの体の所々から血が吹き出してくる。

エーテルの反動によりイリアの体を蝕んでいるのだ。

「がはっ！」

イリアは吐血し、膝を地につける。

イリアのシールドの亀裂が増えていき、今にも破られそうになっている。

「副隊長！」

イリアの危機に里の兵士が加勢するために駆けつけようとした。

しかし、白の兵士に阻まれ、イリアに近づこうとした兵士は瞬く間に肉片に変えられてしまう。

「なぜ邪魔をする！お前等も死ぬことになるんだぞ！」

白の兵士はその問いに無情に応えるのだった。

「残念ながら隊長殿の命令は絶対だね。イリア様との戦いに一切の横槍をさせないようにすることが任務なのですよ」

白い兵士は兜を脱いだ。

漆黒の髪に紅い瞳。

最初に襲撃してきた天使兵の将ギエルだった。

「さてと、あなた方雑兵はこれで十分でしょう」

ギエルは以前天使兵を皆殺しにした深紅の針を大量に出現させる。

そして、既に息絶えている里の兵士の体にそれぞれ針が撃ち込まれていった。

「ぐおあああああ！」

「げえへへへはあああああ！」

死んだはずの兵士達が立ち上がり、イリアに近づこうとする者を阻む壁として立ちふさがってくる。

「命を弄ぶ外道め！」

里の兵士は苦々しげにかつての仲間だったものを見る。

「さあ、かつての仲間だったものと存分に殺し合ってください、ふふふっ…あははははははははっ！」

仲間だったゾンビは容赦なく里の戦士達に襲いかかってくる。

その地獄のような光景にイリアは絶望に打ち拉がれていく。

シールドは今にも破れんばかりに亀裂が走る。

「これが人類軍最恐の〈裁きの女神〉と呼ばれた者の成れの果てか…。失望したぞ、イリア。このまま絶望に打ち拉がれて死ぬといい！」

男の怒気により、ますますシールドに打ち付けられる波動の力が増してくる。

[illegible]

「このミッドガルド全土を覆うシールドは……まさかイリアなのか！」

さらにミッドガルドを守っているシールドのエーテル反応は自分の最愛の女性のもの。

イリアはダルトスが知る限りで〈あの男〉を除けば、最も強大なエーテル力の持ち主であった。

しかし、これほどのシールドを維持させるほどのエーテルを放出し続けてしまえば、イリアの命が…。

ダルトスの血が急激に燃え滾ってくる。

（このままだとイリアの命が！早く行かねば！）

ダルトスの目の前ではタレスが剣を振りかぶっていた。

「戦いの最中…考え事…余裕だな…」

ダルトスはタレスの斬撃を受け止める。

「誰が…余裕…だと…」

ダルトスの剣が徐々にタレスの剣を押していた。

タレスは驚愕する。

力ではダルトスを上回っていたはずだった。

「貴様に…構ってる暇なぞ無い！どけえええええ！」

ダルトスは強引に剣を振り、体格的に自分よりも上回るタレスを弾き飛ばしていく。

「ば、馬鹿な…」

タレスは弾き飛ばされ、民家に激突するのだった。

ダルトスはタレスが民家の瓦礫に埋もれている隙を見て、走り出していく。

「待ってろ！イリア！」

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

イリアとレイア、双子の姉妹とダルトスが出会ったのは、第一次聖戦が終結して間もなくだった。

今にも命が尽きようとしたとき、天使兵の残党を搜索していた当時の異種部隊に所属していたイリアとレイアと出会ったのだった。

異種は天使の血が流れるためか、基本的に天使に対して頭ごなしに敵意を抱いたりはしないものだった。

だから、イリアとレイアの上司に当たる異種部隊の隊長は天使であるダルトスを丁重に持てなすようにイリアとレイアに命じたのだった。

イリアとレイアの献身的介護によりダルトスは順調に回復し、気づいたときにはいつも三人でいることが普通になっていた。

レイアは隊長に想いを寄せていたこともあり、イリアは天使でありながらも人や異種を差別することなく紳士的に接してくれたダルトスに自然と想いを寄せることになる。

ダルトスもまた天使である自分に分け隔て無く接してくれるイリアに想いを寄せるのだった。

まだ、三人が三聖者と呼ばれる以前の出来事。

（なぜ、今頃になって思い出したのだろうか？）

ダルトスに出会う以前のイリアの口調は男性的で威圧的だった。

それはイリアが女であること、異種であることで周囲から嘗められないためだった。

異種部隊の隊長に命じられるまま、冷徹に任務を遂行する姿から「裁きの女神」と呼ばれ、人類軍最恐の存在として知れ渡っていた。

姉さんと隊長を守るために女を捨てたはずだった。

それなのに…。

傷つき倒れている天使ダルトスを見たとき、イリアの中の女が疼いたのだ。

イリアは元々惚れっぽい性格であり、レイアの気持ちを知るまでは異種部隊の隊長にも密かに想いを寄せていたのだった。

イリアはダルトスに振り向いてもらうために必死に女性的な口調で接していった。

ダルトスは途中からイリアの性格には気づいていたが、紳士的に接し、互いに想いを深め合った。

私はダルトスを愛している。

だから守りたかった。

けどもう…。

いよいよイリアの力が尽きようとした矢先だった。

「イリア！無事なのかあ！」

イリアの耳に聞き慣れた声が響く。

「ダルトス…」

私が愛した天使。

「待ってろ！今そっちに行くからな！」

いつもは紳士的で冷静沈着なはずが我を忘れて必死に駆けつけてきてくれている。

思わず泣きそうになってきた。

（そうだ、これが私が守ろうとしている大切な存在）

イリアは地に付いていた膝を上げ、立ち上がっていく。

そして、上空を見上げる。

迫り来る深紅の波動とそれを眺める男。

「負けない…」

絶望に彩っていた瞳に再び強い光が灯る。

「奪わせない…」

シールドに無数にあった亀裂が急激に修復していく。

「守ってみせる！」

シールドが強い輝きを放ってくる。

「持ち直しただと！」

今まで以上に強い輝きを放つシールドを見て、男は驚愕する。

イリアの元に駆けつけようとした兵士を妨害していたゾンビはシールドの輝きに当てられ狂おしい叫声を上げ、消滅していった。

「馬鹿な！この輝きはあの光の柱と同じ波動なのか…」

ギエルは呆然としていた。

「はははははっ！素晴らしいぞ！イリア！さあ、お前の最後の力で私を魅せてくれ！」

男はイリアの力に驚嘆し、狂笑していた。

イリアはそんな男を悲しげに見つめる。

彼はダルトスに想いを寄せる以前に想いを寄せた、いわば初恋の相手。

そして、レイアが想いを寄せた人。

誰よりも強く優しくかった異種部隊隊長だった者。

いつでも戦陣を切って道を示してくれた〈四聖者〉の筆頭だった男。

そして、何よりも私達の親代わりで誰よりも愛してくれた…。

「ひやははははっ！全ての想いの力を込めて私にぶつけて魅せろ！イリア・エスカレーネ！」

イリアの体が純白に輝き出す。

（貴方に何があったかは分からない！けど、だからこそ私の全てをぶつけてみせる！）

「うおおおおおおお！」

ダルトスはイリアが命を燃やしていることに気づき、駆けつけようとする。

「イリアああああああ！」

ダルトスは悲痛な叫びを上げる。

イリアは駆けつけてくるダルトスに微笑み、上空で狂笑しているか
つての上司を睨む。

「これが…私の想いの全てだ！隊長っ！」

シールドは純白の波動となって巨大魔法陣が放つ深紅の波動を包み込んでいく。

ミッドガルが純白の光に包まれていった。

[illegible]

「この光はいい。」

アデルはミッドガルドを照らす純白の光に驚愕していた。

それ以前に上空に巨大な魔法陣が出現し、深紅の波動が放たれたり、それを防ぐようにして展開されたシールド等と自分達が知らない間に進んでいく戦況に混乱していた。

(けど、あのシールドのエーテル反応は…)

そのとき、アデルはリンデが涙を流していることに気づく。

「お母さんが：ボク，戻らないと！」

リンデは涙を拭って来た道を引き返して走り出す。

その俊足はアデルの視界からあつという間に見えなくなるほど速か

つた。

「リンデ！」

アデルはリンデを追っていく。

[illegible]

イリアは限界以上のエーテルを放ち、力尽きて地面に倒れようとした。

ダルトスは駆けつけて倒れようとしたイリアを抱き留めるのだった。
白い兵士からの妨害は無かった。

イリアの輝くような銀髪は老婆のように艶のない白髪となっていた。
ダルトスはそんなイリアの髪を愛おしげに撫でていく。

イリアは目を開け、最愛の天使の顔を見る。

「ああ…ダルトス…もっと…もっと顔を見せて…」

イリアの弱々しい声にダルトスは思わず涙ぐむ。

「私はここだ。ここにいろよ、愛しいイリア…」

イリアの頬に熱い物が落ちる。

イリアはダルトスの頬に手を添える。

「ごめんなさい、もっと…貴方を…支えていきたかった…」

「私こそ…すまない。もっと速く…お前の側にいれば…」

イリアの指がダルトスの瞳から流れている涙を拭っていく。

「悲しまないで、貴方…」

イリアの手が優しくダルトスの頬を撫でていく。

「私は…幸せよ。だって…愛しい貴方の…腕の中で…眠れるのだから…」

「ああ、こんな腕の中で良ければ、いくらでも寝かせてやる！だから…」

ダルトスは涙で濡れた瞳でイリアの顔を見る。

今まで見た中で一番綺麗な笑顔だった。

「ダルトス、もう…貴方の…顔が見えないの…」

イリアの瞳にはもはやダルトスを映していなかった。

ダルトスは頬に添えているイリアの手を強く握る。

少しでもイリアに感じてもらえるように。

「キスを…して。最後…貴方を…感じ…たいの…」

ダルトスはイリアを抱き上げ、顔をそっと寄せる。

「永久に愛してる、イリア…」

「私も…ダルトス…愛してる、永久に…」

ダルトスの唇がイリアのそれに重なる。

イリアの手がダルトスの頬から放れる。

イリアは全ての苦痛から解き放たれたかのような安らかな顔だった。

「イリア…、イリア！イリアあああああ！うおおおおおおお
おおおおおおお！」

ダルトスはイリアを抱きしめ、天に向かって慟哭の叫びを上げていく。

三聖者として幾度も戦場を渡り抜き、裁きの女神と呼ばれ、人類軍最恐の英雄として敵味方共に恐れられたイリア・エスカレーネ。

最愛の天使の腕に抱かれ、唯の女として生涯を閉じたのだった。

ダルトス・エスカレーネ

人類軍本部ヨツンヘイム。

一人の女性が涙を流していた。

「イリア…」

イリアと同じ容姿であり、違う所は輝くように艶のある銀髪が肩の所で切りそろえている。

彼女こそが三聖者最後の一人、軍略、戦術等と頭脳面で軍を率いる現異種部隊隊長ヘレイア・エスカレーネであつた。

レイアはイリアと双子であり、他者よりもエーテルによる感応が強い。

ゆえに遠く離れていてもイリアの感情の変化等を感じることができたのだつた。

イリアから感じてくる感情はレイアにとって心地よかつた。

家族への愛、ミッドガルドに住む民を慈しむ心、どれもがイリアには掛け替えの無いものだった。

だが、もう何も感じられない。

その意味はただ一つ。

イリアは永遠の眠りについたので。

今すぐにも助けに行きたかった。

しかし、自分には信頼を寄せてくれる部下達や力無き民衆がいる。

家族を守る母として、夫を愛する妻として生を全うしたイリアが羨ましい。

ダルトスは大丈夫なのだろうか。

彼は元天使軍擁護派筆頭上級天使であり、ゆくゆくは天使軍最高司令官の座につくかもしれないほどの実力者だった。

彼の力でもってしてもイリアを守りきれなかったのだろうか。

いや、一人だけダルトスでも敵わない男を自分は知っていた。

自分が付いている要職の前任者であった男。

そして、自分が愛した人。

（そう、ついにあの人動き出したわけなの…）

レイアは涙を拭い決意の瞳を露わにする。

（私はこの腐敗した人類軍を変えなければいけない！）

レイアは毅然とした足取りで作戦会議室に向かっていく。

おそらく始まるであろう権力欲に駆られた輩共の無意味で無駄な会議。

（私は人類軍の頂点に立ち、全てを変えていく。それが自分に出来るイリアとダルトスへの手向け…）

レイアは自分の戦場へと向かって歩いていく。

――

ダルトスは永遠の眠りについたイリアを静かに地面に横たわらせ、気配のする方向へと睨み付ける。

そこには白い兵士がいた。

かつて自分の命の恩人であり、師であり、父であり、兄であり、そして友であった男。

「良かったな、最後にお別れできて…。彼女には楽しませてもらったよ。さて、お前は…」

男の言葉が途切れる。

ダルトスが高速で斬りかかってきたからだ。

がきいん！

ダルトスの剣が男の手前で止まる。

男が瞬時に展開したシールドで防がれたのだ。

「相変わらずせっかちな男だ。男は常に紳士であれ、と教えなかったかな？」

せせら笑う男にダルトスは歯ぎしりして剣をシールドに押し込めていく。

「妻を奪った者に対して平然とすることが紳士であるならば、私は畜生であることを選ぶ！」

「やれやれ、度し難いものだな、ダルトス」

シールドが輝き、ダルトスを弾き飛ばしていく。

「ぐふっ！」

弾き飛ばされたダルトスは錐もみするように地面に転倒していく。

「悲しむことはない、直にイリアと再会させてあげよう。冥界で再び契りを交わすがいいさ」

男は周囲に直径3メートルもの光球を幾つも出現させ、ダルトスに向かって放ってくる。

ダルトスは即座に立ち上がり、剣を振るって、光球を切り裂き、または回避して、男に向かって接近していく。

ダルトスの剣が男が展開したシールドに激突する。

「なぜだ！なぜミッドガルドを！ここは貴方が建てた里だったはず！」

「私が作った物だ！ならば、壊すのも自由だろう！」

再びシールドが輝き、ダルトスを弾き飛ばそうとする。

だが、ダルトスは踏みとどまり、剣をさらに強くシールドに打ち付けていく。

「神は全てを与え、全てを奪うものだ！分かるだろう、ダルトスよ！」

シールドから無数の刃が生え、ダルトスの右肩と脇腹を貫いていく。

「ぐはっ！くっ、私には：分からない！分かりたくもない！」

ダルトスは血を吐きながらも自分を貫いている刃を叩き折り、剣で何度もシールドに斬りつける。

シールドに亀裂が走っていく。

「イリアは：イリアは貴方を慕っていた！貴方もイリアを妹のように可愛がってたはずだ！」

ダルトスの怒りと共にシールドにさらに亀裂が走っていく。

「応えろおお！隊長おおおお！」

ダルトスは怒りがついに男のシールドを砕く。

男はエーテルソードでダルトスの剣を受け止めていく。

「ははははははっ！私に剣を使わせるとは腕を上げたな！」

男は獰猛な笑むを上げ、高速で剣を振るってくる。

ダルトスと男の剣が何度もぶつかり合う。

二人の剣圧は周囲に爆音となって響き渡っていく。

ギエルとダルトスを追って駆けつけてきたタレスはただ二人の戦いを見守っていた。

もうミッドガルドの住民はダルトスだけとなっていた。

白い兵士達は里の戦士の返り血により、深紅に彩られた鎧を纏っていた。

「うおおおおおっ！」

ダルトスは渾身の一撃を放ち、男の剣を弾く。

そのまま、ダルトスの剣が男の首を尻ごうと横薙ぎをしてくる。

だが、男はダルトスの剣を素手で鷲づかみしてくる。

ダルトスの剣に男の血が滴っていく。

「いいぞ！実がいい！イリアも楽しませてくれたが、お前は格別だ！あははははっ！」

男は今度はダルトスの顔を鷲づかみして吊り上げていく。

「ぐっ…ああああああ！」

ダルトスは苦悶の声を上げ、必死に男の手を振り払おうとする。

「問いに応えようか、私がイリアを、ミッドガルドを愛していたからだよ…」

「なん…だと…」

男の指がダルトスの頭に食い込み、血が男の仮面を紅く染めていく。

「愛しているものをどうすれば自分のものにできるか？それは自分の手で壊すことだ、私は愛しているからこそ、イリアをミッドガルドを壊したのだよ…」

狂っている。

（この男は何として止めなければ…）

「ぐおおおおおああ！」

ダルトスはあらん限りのエーテルを体から放出する。

「ぬっ！」

ダルトスの頭を掴んでいた手が緩む。

（今だっ！）

ダルトスは男の手を振り払い、拳を振り上げ、男の顔を殴り付ける。

「ぐっ！」

男はよろけ、ダルトスはその隙に距離を取っていく。

「貴方は私の師であり、父であり、兄でもあった。今でもその気持ちは変わらない！だからこそ、狂っていく貴方を全力で止めさせていただく！」

ダルトスは男を見据える。

男の仮面に亀裂が走っていた。

純白に彩られた鎧も兜もダルトスの返り血によって斑模様となっていた。

「お前が初めてだ。私に一撃を入れたのは…。お前ならば私の翼を潤してくれるだろうな…」

男は背中から翼を広げていく。

その翼は深紅に彩られていた。

ダルトスはその翼を見たとき、吐き気がしてきた。

翼には濃い死臭が漂っていたからだ。

男の威圧感がさらに増してくる。

「私を満足させるのだ、ダルトス。そのために少々趣向を凝らそうか」

「ゲームだと？」

男は笑い、指を鳴らす。

そのとき、男の周囲の空間が捻れ、人影が見えてくる。

人影は二つ。

それは…。

「リンデ！アデル！」

ダルトスは愕然とする。

逃げたはずの二人が男の力によって強制召還されたのだ。

リンデとアデルは戸惑っていた。

二人はイリアの所へと戻ろうと走っていたはずだった。

だが、突如、目の前の空間が歪み、二人を吸い込んでしまったのだ。

気づくといつの間にか別の場所にいたのだった。

そこにはダルトスと深紅の翼を広げている血塗れの天使がいた。

二人が逃げ出す前にイリアと対峙していた天使だった。

そして、少し離れた所にイリアが横たわっている。

イリアは血の気を失い、眠っていたのだ。

もう二度と醒めることのない永遠の眠りに…。

「お母さん…、おかあさん！」

リンデはイリアの元に駆けつけようとする。

しかし、突然リンデの足下から魔法陣が出現し、凄まじい激痛と共

に拘束してくる。

「うああああああっ！」

リンデはあまりの激痛に絶叫する。

アデルもまた魔法陣によって拘束されていた。

「どういふつもりだ！」

ダルトスは男を憤怒の表情で見る。

「言っただろう、趣向を凝らすと…」

二人を拘束した魔法陣は男の背後へと移動する。

リンデは激痛に苛まれながらも倒れているイリアに向かって手を伸ばすのだった。

もうイリアがリンデに笑いかけてくれることは二度と無い。

『もし帰ってこれたら家族で食事パーティをしましょ、約束ね…』

「おか…あ…さん…」

リンデの瞳から涙が次から次へとこぼれ落ちていく。

「くっ！」

悲しんでいるリンデを目の前にしておきながらアデルは何も出来な

い自分に腹立たしく思った。

『アデル君，リンデを頼むわね…』

「母さんに任されたはずなのに，俺は何もできないじゃないか…」

二人が苦悶している様子を男は恍惚と眺め，ダルトスの方に振り向く。

「10分だ！10分間私と戦って生き延びて見せろ。それが出来たら二人を解放してやろう！」

男は両手を広げ，最高の舞台を演出するように声高に宣言する。

「10分間だと？それで貴様を倒してみせる！」

ダルトスは苦しむ二人を見る。

必ず助け出してみせる。

ダルトスは剣を男に向ける。

男はダルトスの顔を見て，宛然と笑った。

「良い顔だ！お前の怒りの炎が私の心を焦がしてくれる！愛してるぞ！ダルトス！お前の血で私の翼を潤してくれ！そして，最後に壊してくれようぞ！」

男の深紅の翼が広がっていく。

リンデはダルトスと戦っている男を見る。

夕焼けのように寂しげで残酷な血のように禍々しく輝く翼。

「黄昏の…翼…」

リンデはふと呟いた。

男の動きが僅かだが止まり再度翼を広げ、ダルトスを包み込むような深紅の波動が放出される。

「凌いでみせる！」

ダルトスはシールドを纏いながら自分から波動の方へと突進していく。

シールドは波動の力により、ひび割れていく。

それでもダルトスは止まらなかった。

「お父さん！」

リンデの悲痛な叫び声がなぜかダルトスの耳に鮮明に届く。

ダルトスは一瞬、リンデの方向を見る。

魔法陣で苦痛に苛まれながらも懸命にダルトスに視線を向けている。

アデルもまた表情を変えることなくただダルトスを見ていた。

（私は守らなければならない！イリアのためにも！）

シールドが碎け散り、ダルトスの体の至る所に裂傷が刻まれていく。

「うおおおおおっ！」

ダルトスは全身から血を吹き出しながらも波動を突っ切り、剣を男に向けていく。

「さあ、きてみろおおお！ダルトスううううう！」

男は両手を広げ、ダルトスの剣を迎えようとする。

ずしゃっ！

ダルトスの剣が男の胸を貫く。

「やった…のか…」

アデルは二人の戦いの様子に身を乗り出そうとする。

「まだ…だよ…」

リンデは苦しげにアデルの言葉を否定する。

アデルはリンデの方を向く。

「お願い…逃げて…おとう…さん」

アデルは再び二人の戦いを見た。

男は胸を貫かれながらも笑みを浮かべていた。

「はははははっ！痛い！痛いぞ！ああ，まさか私に一撃を加えるどころか血までも流させるとは…」

男は恍惚と眩き，貫いている剣を掴む。

ダルトスはおどましいほどの男の狂気に背筋が凍えていた。

「隊長，貴方はなぜこれほどまでに…墜ちたのだ…」

「墜ちた，いや違うぞ，ダルトス，私は目覚めたのだよ…。怒りと…憎しみと…悲しみでもってな！」

ダルトスは悲しげに男を見る。

「もう私が敬愛していた隊長は…いないというのか！」

ダルトスは狂笑する。

「これが私だよ，ダルトス。そして，残念だったな。後僅かで私の心臓から剣が逸れたぞ！意図的に外したか，単に失敗したか，そんなのはどうでもいい！」

男はダルトスの剣を掴んだまま，もう片方の剣を持った腕を振り上げる。

「ペナルティーだ…」

ずしゃっ！

男の剣がダルトスの左腕を切断していく。

「ぐあああああっ！」

切断面から鮮血を吹き出しながら絶叫するダルトス。

鮮血が男の深紅の翼に降り注いでいく。

「あははははっ！潤うぞ！私の翼が！〈黄昏の翼〉が！私の乾きを癒してくれるぞ！」

男は胸を貫いている剣を引き抜く。

血が噴き出し、もはや全身が深紅に染められていたが、それでも男は狂ったように笑い続ける。

ふと男は笑いを止める。

「後5分だ、まだまだ楽しませてくれよ、ダルトス！」

男はダルトスの胸に掌を当て、エーテル波を放出する。

「ぐぼお！」

ダルトスは口から大量の血を吐き、弾き飛ばされていく。

リンデとアデルは血まみれになり、打ち拉がれていくダルトスの姿に目を逸らしたくなっていた。

「どうして…どうしてこんな酷いことを…」

最強だと信じていたダルトスがあゝの黄昏の翼を持つ男にまるで歯が立たない。

『間もなく終わり無き悪夢が開幕するだろう』

（これがお前がいう悪夢なのか…）

リンデは必死に体を動かそうとする。

だが、そんなリンデを魔法陣が無情にも逃がそうとしなかった。

そして、ダルトスは男に弾き飛ばされ、地面に叩き付けられていく。

倒れているダルトスに眠るように死んでいたイリアの姿が重なる。

「嫌だ…」

リンデは叫ぶ。

「立って！」

リンデの声が響く。

「立って！お父さん！」

リンデは倒れているダルトスに必死に呼びかける。

[illegible]

ダルトスは真つ白な世界に立っていた。

その世界の果てにはイリリアが悲しげにダルトスを見つめていた。

（すまない、イリア、私は……家族を……リンデを……アデルを……守つてやれなかった……）

ダルトスは一歩また一歩とイリアに近づいていく。

イリアが手を伸ばしてくる。

ダルトスはイリアの手を掴もうとする。

イリアの手に触れれば、もう自分もこの世界の住人となるだろう。

だが、イリアの手に触れようとした瞬間、耳元から声が聞こえてくる。

『お父さん!』

この声は…。

ダルトスは思い出す。

イリアと結ばれてから子を授かったときのことを…。

辿々しい声でお父さんと自分を呼んでくれたことを…。

ダルトスは幾度も戦場を駆けめぐり、数え切れないほどの血を手染めてきた。

そんな血に汚れた手をリンデは小さな手で握り、笑顔でお父さんと言ってくれた。

そのとき、涙を流してリンデを抱きしめた。

こんな私でも父と呼んでくれるリンデ。

献身的に支えてくれたイリア。

本当の父として慕ってくれたアデル。

ダルトスは伸ばしていた手を引く。

（私には……まだ、やらなければならないことが残っている……）

ダルトスはイリアを見つめる。

イリアは微笑んでいた。

（もう少しの間、待っててくれ、イリア…）

ダルトスはイリアに背を向けて白の世界を後にする。

愛しい娘の聲に導かれて……。

[illegible]

男は倒れているダルトスを見下ろしていた。

「興ざめだな、もう少し楽しませてくれると思っていたぞ、ダルトス…」

男はつまらなそうに倒れているダルトスに問いかける。

「耐えたのは7分だったか…。残念だったな、私の勝ちだ」

男は倒れているダルトスに背を向け、魔法陣に捉えられている二人の元へと行こうとする。

「待て…」

背後から声が聞こえ、男は振り返る。

そこには全身に血を濡らしながらも阿修羅の如き形相で男を睨む者がいた。

「まだ後3分残っているぞ…」

「馬鹿な…。まだ、立てるといのか…」

男はダルトスから後ずさっている自分に気づき驚愕する。

「まさか、私がダルトスに恐怖を抱いているというのか！」

男もまた禍々しいエーテルを周囲に散漫させ、ダルトスを睨む。

ダルトスは視線をリンデとアデルに向けて微笑み、口を動かす。

（私の家族でいてくれて、ありがとう…）

リンデは口を動かして言葉を聞き取り、泣き崩れる。

「お父さん！おとおさん！」

「リンデっ！」

泣き崩れるリンデに声をかけるアデル。

アデルもまた顔を涙で濡らしていた。

「父さんの…最後の勇姿を目を逸らさずに見るんだ！」

「アデル…」

リンデは瞬きもせず父の姿を見つめていく。

ダルトスは二人から男に視線を向ける。

「さあ、ゲームを再開しようか、隊長…」

残った片腕に膨大なるエーテルを凝縮させていく。

「許さんぞ！ダルトス！私を僅かとはいえ恐怖を抱かせるとは！ふはははははっ！もうゲームオーバーだ！絶望を抱いて死ぬがいい！」

男は翼を広げ、頭上に直径10メートルほどの深紅の光球を出現させる。

ダルトスは手を天に掲げる。

「とくと目に焼き付けておけ！この三聖者筆頭ダルトス・エスカレーネの生涯最後にして最高の奥義を披露してくれようぞ！」

目映いほどに輝く黄金のエーテルソードがダルトスの手にあった。

「その黄金の剣は…まさか！」

男はダルトスが持つ黄金の剣を見て動揺する。

「そうだ！これは貴方が教えてくれた最強の神技だ、隊長っ！」

ダルトスは黄金の剣を振りかぶり、男に向かって突進していく。

男は突進してくるダルトスを迎撃せんと頭上の光球を発射する。

「おのれええええ！死ねえい！ダルトス！コロナ・エクスキューション！」

「自分の技を存分に味わえ！隊長！ラグナ・ディストール！」

どごおおおおおおん！

交差した二人を中心に大爆発が起こる。

爆発の余波により魔法陣が破壊され、リンデとアデルは吹き飛ばされていく。

「リンデえええ！」

「アデルっ！」

アデルは咄嗟にリンデを抱え込み、二人で抱き合うように地面に転がり込んでいく。

「くっ…大丈夫か、リンデ…」

「うん、ありがとう、アデル…」

二人は立ち上がり、当たりを見渡す。

緑豊かだったミッドガルドは焦土と化していた。

「お父さん、お父さんは！」

「爆心地はあっちだ、リンデ！」

アデルはリンデの手を引っ張り、爆心地に向かって走っていく。

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

ダルトスの残った片腕は肉片となって爆ぜていた。

男の方は無傷であり、ダルトスを嘲笑する。

「はははははっ！ どうやら技の威力に体が耐えきれなかったようだな。どうやら今度こそ私の勝ちのようだな！」

ダルトスは嘲笑する男に不敵に笑い返す。

それに気づき、男は笑みを消す。

「何がおかしい？」

「ふふっ、自分が負けたと知らず笑っている貴方を滑稽だと思ったからだ…」

「なん…だと…」

男にはダルトスが何を言っているのか分からなかった。

ダルトスは男を哀れむようにして見る。

「私の勝ちだ。ジャスト10分経過、ゲームオーバーだ…」

ダルトスは力尽きて倒れる。

「なっ！馬鹿な…」

男は失念していた。

致命傷にもかかわらず立ち上がり、自分の奥義を繰り出されたことで冷静さを失い、ゲームであることを忘れていたのだった。

男は実感した。

自分はダルトスに負けたことを。

「お父さん！」

倒れているダルトスにリンデとアデルが駆けつけていく。

「リンデ…アデル…」

リンデの涙がダルトスの頬に落ちていく。

ダルトスはリンデが生まれ、自分の腕の中で泣き続けていた姿を思い出す。

「泣くな…リンデ…」

ダルトスはすでに両腕が無い。

最後に抱きしめてあげれないのが残念だった。

それを察したかのようにアデルは泣きじゃくるリンデを後ろから抱きしめる。

まるで自分の代わりに炊きしてくれているかのように。

「アデル…リンデを…頼む…私の…息子でいてくれて…ありがとう…」

「はい、父さん…」

アデルはリンデを抱きしめながらも涙を流す。

ダルトスは泣いているリンデに顔を向ける。

「リンデ…愛しい…我が娘…強く…強く…生きて…く…れ…」

ダルトスは疲れを癒すようにして目を閉じた。

「お父さん…」

リンデは眠っているダルトスに呼びかけるが返事は無かった。

「お父さん，お父さん，お父さん…」

何度揺さぶってもダルトスはもう目覚めようとしなかった。

「お願い，目を覚ましてよ。男は常に紳士的であれ，って言ってたよね…」

ダルトスはイリアと同じく眠っているかのようだった。

「女性の呼びかけに応えないなんて紳士失格だよ！お父さん！」

リンデは眠っているダルトスにさらに揺さぶろうとしたところ，アデルが強く抱きしめて止める。

「もう止めるんだ！リンデ！」

「嫌だ！お父さんはいつだってボクの呼びかけに…」

アデルはさらに強くリンデを抱きしめて厳しい口調で呼びかける。

「父さんは…父さんは…もう死んだんだ！俺達を…家族を守って！」

「…っ！」

リンデはアデルを見つめる。

アデルの顔は涙で濡れ，唇から血が流れている。

「ごめん！ごめんね，アデルだって辛いのに…」

「大丈夫だ。まだ，一人なんかじゃない。俺が…俺が側にいるから…」

リンデはアデルに支えながらも涙を拭い立ち上がった。

目の前には両親を殺した男がいる。

「ダルトスは偉大な英雄だった…」

男はどこか悲しげに言う。

リンデは男を憎悪で満ちた瞳で睨み付ける。

「だが，お前は塵に等しい存在だ。お前の血では我が翼も穢れるというもの…」

リンデを道端に転がる小石を見るかのような目で見下ろす男。

男はダルトスとのゲームの約束でリンデとアデルを解放するようだ。

お父さんの命と引き替えに自分たちは見逃されるのだ。

アデルがリンデの手を強く握る。

（今は耐えろ）

アデルの目はそう言っていた。

「ボクは…」

リンデは言葉を飲み込む。

「私”は、リンデ・エスカレーネはお前を絶対に殺す…」

リンデは一人称を“ボク”から“私”へと言い換える。

元々アデルに対抗して男のように振る舞うために言ってきた子供の言葉。

だが、そんな幼い自分と決別するために“私”と言い直す。

今の自分では確かにこの男にとって塵にも等しい存在。

（けど、故郷を、両親を奪った男をいつか絶対に！）

そんなリンデの決意に男は笑う。

「リンデ・エスカレーネ、偉大なる英雄の娘よ。お前は私のことを〈黄昏の翼〉と呼んだ。ならば、そう呼ぶが良かろう…」

男は深紅の、黄昏の翼を広げ、上空へと飛ぶ。

「いつか私の元へと辿り着けた時、お前の血で我が翼を清めてやろうぞ！リンデ・エスカレーネ！」

リンデに〈黄昏の翼〉と名付けられた男は虚空の彼方へと消えていく。

他の白い兵士達もいつの間にか消えていた。

廃墟となったミッドガルドはリンデとアデルの二人だけになっていた。

二人から故郷を奪つた黄昏の翼。

二人は復讐を胸に秘め、黄昏の翼が消えていった空をいつまでも見続けるのだった。

[illegible]

ダルトスは再び白の世界に佇んでいた。

そして、世界の果てにはイリアが微笑んで待っていた。

（待たせたな、イリア…）

イリアは再び手を差しのばす。

ダルトスは今度はイリアの手を掴み、抱き寄せる。

（紳士は女性を待たせる者ではないわよ、ダルトス…）

（すまなかった…）

イリアはダルトスの胸に顔を埋める。

（冗談、貴方は十分に紳士的よ。私達の家族を守ってくれたのだから…）

イリアの両腕がダルトスの背中に回る。

もう二度と離さないといわんばかりに。

（ずっと一緒だ、イリア…）

（愛してるわ、ダルトス…）

白の世界は二人を祝福するかのように純白の光で包み込んでいくのだった。

天使の翼を喰らう者（前書き）

この作品は処女作であり、久しぶりの次話投稿です。

文章スタイルが変わったり、内容が矛盾しているかもしれません。

天使の翼を喰らう者

私はリンデ・エスカレーネ。

かつての英雄ダルトス・エスカレーネとイリア・エスカレーネの間で誕生した異種。

私は天使を狩っている。

狩って、狩って、狩りまくって、翼を貪っている。

私の異種能力〈翼喰らい〉は天使の翼を吸収することで際限なくエーテル力を高めていく。

今や中級天使ですらも雑兵でしかない。

けど、足りない。

まだ、足りない。

まだ、私の力ではあの〈黄昏の翼〉には遠く及ばない。

人類軍最強の三聖者にして、リーダーだったお父さんを見事に殺した〈黄昏の翼〉。

あの黄昏の翼を殺さない限り、私は前に進めない。

「この出来損ないが！」

振り向かなくても分かる。

下級天使が剣を振りかぶってるのだ。

私は自動機械のように振り向き様に剣を薙ぎ払い、返り血を浴びる。

「手応えがない。まるで紙を切っているみたい…」

剣を振るい、血を払う。

今日の天使狩りはここまで。

私はアジトに戻っていく。

[illegible]

「相変わらず、派手にやったようだな。血塗れのリンデ」

私を出迎えたのはアデル。

アデル・エスカレーネ。

私と同じ故郷出身であり、兄のような存在。

消滅したミッドガルドを出てから、私を影で支えてくれた唯一無二のパートナー。

「何度言ったら分かる。血を早々に洗い流せ。あまり血の匂いが染みついていると相手に無用な警戒心を抱かせることに繋がる…」

「もう遅いよ、アデル。私にとって血の匂いは体の一部。私に体の一部を引きちぎれて言うの？」

アデルは嫌みなほどにいつも冷静だった。

顔立ちは下手な女よりもよっぽど美人だからこそ、尚更嫌みなように見えてくる。

だから、私はついアデルに反発してしまう。

「分かっているのか？お前は俺達〈翼断つ者〉の旗頭だ。立場をもう少し理解しろ…」

「だったら、アデルがリーダーになればいいよ。私の取り柄は天使を狩ることだけなのだから…」

ミッドガルドにいた頃はアデルに素直に従っていたのに。

どこですれ違ってしまったのだろうか。

「どうやら、慢心しているようだな、リンデ。表に出ろ、修正してやる」

「望む所よ。今度こそアデルを地面に寝かせてあげる」

私とアデルは表に出ようとする。

「おいおい、またお二人さんで熱いデートかい？ 今度はどちらが押し倒されるやら？」

「俺は今度こそリンデがアデルを押し倒すのに賭けるぜ」

「私はアデルが押し倒すのに賭けるよ。やはり男が女をリードしないといけないでしょう」

ギャラリーが好き放題に言っている。

けど、私にとっては些細な雑音でしかない。

今度こそアデルに勝ってみせる。

――――

「さあ、遠慮はいらん。どこからでも来い、リンデ…」

アデルは剣を構えること無く、ただ手に持っているだけの体勢だった。

リンデは動こうとしない。

いや、動けなかったのだ。

（隙がない！まるで空気のように何も感じられない…）

リンデの額に汗が流れてくる。

リンデとアデルは幾度も訓練で剣を交えていた。

リンデの戦績は全戦全敗。

アデルに一度も勝ててない。

力とスピードは数え切れないほどの翼を貪り、力を増したリンデの方に分があるはずだった。

けれど、リンデはアデルに勝てないのだ。

「どうした、怖じ気づいたのか？」

「くっ！嘗めるなっ！」

リンデが風の刃の如く、アデルに斬りかかっていく。

上級天使でさえ、視認することが困難だろう。

だが、アデルは草を払うかのように剣を振り、リンデの斬撃を受け流す。

「…っ！」

リンデにとっては渾身の一撃だったのかもしれない。

だから、受け流されるとは思っていなかったのだろう。

僅かにリンデの動きが硬直する。

それをアデルが見逃すはずがなかった。

かきんっ！

リンデの剣を空高く投げ出され、空しく地面に落ちていく。

「まだまだだな…」

アデルの剣が気だるげにリンデの首筋を撫でていく。

「それはこっちの台詞よ！」

リンデはアデルに体当たりを仕掛けようとしてくる。

戦場では例え、武器が無くても己の身一つあれば、いくらでも戦っていける。

勝敗は生きるか死ぬかの問題だ。

「甘いな…」

アデルはリンデのタックルを体を逸らすだけで避け、手でとんとリンデの体を押す。

びたーん！

リンデはアデルに体を押されて勢いを殺すことが出来ず、そのまま地面に転倒していった。

「ふっ、地面に寝るのはリンデだったみたいだな…」

「ち、畜生！少しは手加減しろ！」

リンデは思わず、昔みたいにアデルに罵声を浴びせていた。

そのリンデにアデルはますます意地悪な笑みを浮かべて見下ろしてくる。

「ふふっ、反省しろよ、リンデ…」

アデルは笑いながら立ち去っていく。

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
8	1
9	1
10	1
11	1
12	1
13	1
14	1
15	1
16	1
17	1
18	1
19	1
20	1
21	1
22	1
23	1
24	1
25	1
26	1
27	1
28	1
29	1
30	1
31	1
32	1
33	1
34	1
35	1
36	1
37	1
38	1
39	1
40	1
41	1
42	1
43	1
44	1
45	1
46	1
47	1
48	1
49	1
50	1
51	1
52	1
53	1
54	1
55	1
56	1
57	1
58	1
59	1
60	1
61	1
62	1
63	1
64	1
65	1
66	1
67	1
68	1
69	1
70	1
71	1
72	1
73	1
74	1
75	1
76	1
77	1
78	1
79	1
80	1
81	1
82	1
83	1
84	1
85	1
86	1
87	1
88	1
89	1
90	1
91	1
92	1
93	1
94	1
95	1
96	1
97	1
98	1
99	1
100	1

また負けてしまった。

なぜ勝てない。

私は力やスピードではアデルに勝っているはず。

どうしてなんだ。

ムシヤクシヤしたときには天使狩りがいい。

早くどこかで天使を狩りたい。

狩っていつて強くなりたい。

早くアデルに認めてもらいたい。

私はミッドガルドから出てから、アデルに影に日向に支えられてきた。

その頃の私とアデルの生活は何振り構わないほどの道のりだった。

『お前には翼喰らいの能力があるらしい。強くなりたければ、使いこなせ。自分を見失うな』

アデルは当時右も左も知らない私に学問、剣技、処世術、戦略、戦術など生きるために必要なものを徹底的に叩き込まれた。

まさに地獄の特訓だったと言っている。

私は何度頭の中でアデルを殺していったか数知れない。

けど、その地獄の特訓があったからこそ私は地獄の戦場で生き抜いていった。

そのことに対しては悔しいけど、感謝するしかない。

今の私があるのはアデルのお陰なのだから。

だからこそ、アデルに認めてもらいたい。

成長した自分を見せていきたい。

「ボクは、私は強くなる…」

気を抜いてしまうといふ“ボク”と言ってしまう。

これだけは絶対にアデルに聞かせてはいけない。

絶対にアデルは笑ってくる。

昔の自分はもう死んだのだ。

私はリンデ・エスカレーネ。

天使を狩る者。

天使の翼を喰らう者。

黄昏の翼を追う者。

それが私。

天使の翼を喰らう者（後書き）

ハーレム作品も執筆中ですけど、たまには重厚な物語もいいですね。

この作品が重厚かどうかは別として…。

御感想お待ちしております。

翼舞い散る戦場

戦場は弾丸とエーテル波が飛び舞っていた。

血と肉と汗と涙が混じり合うオブジェ。

そんな光景をリンデはただ静かに見据えていた。

彼女にとって、それは夜空に打ち上げられる花火を見るような有り触れた光景。

ここがリンデ・エスカレーネ、天使の翼を狩る者の居場所なのだから。

前方には数百万もの天使兵が集結していた。

対するはリンデとアデルが率いる〈翼断つ者〉数十万。

〈翼断つ者〉はリンデとアデルが結成した天使軍へのレジスタンス。

リンデが天使を狩る活躍に惹かれ、集結して出来た組織だった。

「どうやら、天使軍は本気で俺達を討伐しに来たようだな…」

淡々とした口調で唱える青年の名はアデル・エスカレーネ。

リンデの片腕として、影から支える存在。

「望む所よ。これでまた、一步あいつに近づくことができる…」

アデルの静かな声にリンデは寧猛な笑みで答える。

戦えば、戦うほど強くなれるリンデにとって危険な戦場ほど格好の修行場は無かった。

そんなリンデにアデルはため息をつく。

「その台詞をこの戦場を生き延びてからにしろ。今回は上級天使が指揮官だ…」

アデルの言葉にリンデの笑みが消えていく。

上級天使。

天使軍の最高戦力であり、人間でいう一人軍隊ワンマンアーミーの存在である。

稀少故に後方で指揮を執っていることが多いが例外もまたあるのだ。

「理解したか？今回は翼を狩ることではなく、生き延びることを第一に考える…」

「上等よ。上級天使の翼を喰らえば、私は今までよりも格段に強くなる」

リンデにとって強い天使ほど好物は無かった。

翼を喰らうのに、翼の持ち主である天使が強ければ強いほど喰らったときに得られる力が高まってくる。

「私はやる。ここで倒れるなら所詮ここまでのことよ!」

リンデは群がってくる天使兵に向かって突っ込んでいく。

「ちっ、世話が焼ける。仕方ない。お前等、マシンガンにバズーカ、ありったけの重火器を所持しろ! 出陣するぞ!」

「うおおおおっ!」

アデルは前方を見る。

そこには群がっている天使兵等に赤い花びらを散らしているリンデがいる。

彼女はともかく猪突猛進で、自分勝手に自己中心的である。

だが、そんなリンデをアデルは見捨てることは決してなかった。

「あいつは俺の妹分だ。だから、必ず守ってみせる」

アデルはリンデの死んだ両親には本当の息子のように愛してもらっていた。

そして、アデルにリンデの未来を託して逝ってしまった。

両親の思いに報いるためにもアデルはリンデのために戦っていく。

「撃ち方用意!」

兵士達が一糸乱れぬ動きで銃口を天使兵に向けていく。

「フ
ア
イ
ヤ
ー
！」

弾幕の嵐が天使兵を包み込む。

「撃って撃って撃ちまくれっ！」

戦場に血の霧が立ちこめていく。

對抗して天使兵は屍を盾にして、ホーリーアローを無差別に放ってくる。

「ぐはっ！」

「ぎゃああ！」

「慌てるな！ エンジェリウムの盾を持てっ！ ホーリーアローぐらいなら防げる！ 全軍盾を持って突撃するぞ！」

「制圧せよ！」

翼断つ者と天使兵が戦場で入り乱れていく。

| | | | | | | | | | | | | | | |

リンデは何も考えずにひたすら剣を振るっていた。

それだけで、彼女の周りに血の霧が吹いていた。

「雑魚共には用はない！ 疾く死ね！」

ぶしゃあああつ！

鮮血が彼女の体を彩っていく。

（私は私の目的のために天使を狩っている。天使を狩っている。お父さんと同じ天使を…）

リンデは上級天使であるダルトスの娘だった。

ひょっとして、自分が斬っている天使兵の中にダルトスに従って戦ってきた者がいるかもしれない。

（天使にとっては私が黄昏の翼になるだろうね…）

ずしゃつ！

天使兵が紙人形のように脆くリンデの剣で両断されていく。

（だけど、私はもう止まらない。私は決めたから…）

剣を横薙ぎにして、天使兵数体を纏めて斬り捨てていく。

（あの黄昏の翼を必ず倒すと…）

リンデは群がる天使兵から距離を取ってエーテルを集中させる。

（お父さん、お母さん、私に戦う力を！）

「劣種共に裁きの刃を！」

「天に召すがいい！」

天使兵がエーテル波を一斉にリンデに向かって放ってくる。

リンデの掌から直径10mほどの光球が出現してくる。

「全てを消し飛ばす！セイントバースト！」

リンデは光球を投げつける。

光球は天使兵の放ったエーテル波を吸収し、さらに巨大化していく。

戦場に凄まじい爆風が舞い上がっていく。

「はあああああっ！」

爆発で混乱している天使兵を瞬く間もなく斬り捨てていくリンデ。

（これが私が辿る道…）

天使兵の首が宙に舞っていく。

ふとリンデは上空にエーテル反応を感じる。

上空は無数の魔法陣に埋め尽くされていく。

「天の雷を受けよっ！セレスティアル・レイ！」

魔法陣から全てを焼き尽くす閃光が上空から次々と放たれていく。

どごおおおおん！

閃光の衝撃に戦場の大地は何度も揺らいでいく。

「くっ！味方ごと私を始末する気か？」

リンデは閃光の雨をかいくぐっていくが、前方の天使兵が逃げ場を塞いでくる。

「邪魔だ！どけえええ！」

リンデは何度も剣を振るって天使兵を薙ぎ払うが砂糖菓子に群がる蟻のように集ってくる。

（このままだと、やられてしまう！）

上空には閃光が雨のように降り注いでいる。

リンデは天使兵に阻まれていて身動きが取れない。

閃光が直撃するのも時間の問題だった。

「相変わらず世話が焼けるな…」

リンデの周囲にシールドが展開されていた。

「アデル…」

「さあ、生き残るぞ…。お前の戦いはまだこれからなんだからな…」

アデルは群がってくる天使兵を斬り払っていく。

「言われなくても分かってるよ…」

リンデはアデルの背中に立ち、天使兵を薙ぎ払っていく。

「けど、助けてくれて…ありがとう…」

リンデはアデルにそう言って、逃げるように天使兵に大群に突っ込んでいく。

「どういたしまして…」

アデルはリンデを追うようにして戦場を駆け抜けていく。

|
| |

翼断つ者と天使軍の戦いは凄惨極まるものだった。

天を両断するようなエーテル波，エンジンリウムで加工された兵器の火力。

戦場の大地は血と肉で埋め尽くされていく。

「爆撃機を出撃させろ！出し惜しみするな！トリ共を叩き落とせ！」

制空権を確保して戦況を有利に進めてこようとする天使兵を牽制する形で戦闘飛行機を出撃させる翼断つ者。

「空を汚す羽虫共め！天の雷によって購わせてやる！」

爆撃機をエーテル波で打ち落とそうとする天使兵。

「甘いぜ！これにはシールドも搭載されてるんだぜ！」

爆撃機はシールドを展開してエーテル波を弾いていく。

「的がいっぱいだから、狙い撃つ必要もねえな！」

「誰が一番多くトリを撃ち落とすか競争だぜ！」

「では、私が勝たせてもらいますよ！」

天使兵は狩人に狙われた鳥のように次々と撃ち落とされていく。

「こしゃくな！これでも喰らえ！」

空に魔法陣が無数に展開されていく。

「やばいな！おい！散開しろ！」

魔法陣が一斉に輝きだしてくる。

「滅せよ！ホーリー・カノン！」

魔法陣から光弾が撃ち出されていく。

光弾は吹雪のように視界を埋め尽くし、爆撃機を蹂躪しようとしてくる。

「ぐああああっ！」

回避しきれない爆撃機が次々に墜落させられる。

「ここは私がやるわ！」

光弾の吹雪の前に一人の女性が立ちはだかった。

「大将！」

「リンデ姐さん！」

リンデはエーテル力で上空を飛んでいったのだ。

リンデはゆっくりと剣を鞘に収め、エーテル力を集中していく。

光弾の吹雪がリンデを呑み込もうとしてくる。

「リンデ！」

アデルはリンデが光弾の吹雪に呑まれようとしたところを見て、駆けつけようとする。

「はあああああっ！」

リンデは裂帛の気合いと共に剣を横に凧いでいく。

光弾の吹雪はリンデの剣圧によって、真横に両断され、後方の魔法陣を根こそぎ破壊していった。

そんなリンデの離れ業を見て、アデルは苦笑する。

「馬鹿力だけは一人前だな…」

アデルはリンデの横に並んでいく。

「このまま一気に畳みかけるぞ、リンデ！」

「そのつもりよ、アデル！」

リンデとアデルは上空を埋め尽くしている天使兵を蹂躪していく。

翼断つ者の軍勢は二人の後を追うようにして雪崩れ込む。

翼断つ者のナンバー1とナンバー2。

二人が揃えば、まさに無敵だ。

翼断つ者の誰もが二人の武勇を見て、戦いの勝利を疑わなかった。

そう思っていた矢先だった。

『なるほど、貴方達が我等天使を脅かしている異物なのか…』

リンデとアデルは動きを止める。

空全体を包み込むような膨大なプレッシャーを感じたのだ。

大気が震え、大地が揺れていた。

「いよいよね、アデル…」

「ああ、来るぞ、リンデ…」

空間が歪み、魔法陣が展開された。

そして、魔法陣の中心に一体の天使が現れる。

「お初にお目にかかる。我が名はヘシディエル。異物を排除する断罪者だ：」

天使軍最高戦力である上級天使が戦場に降臨したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0219r/>

ウイングブレイカー

2011年10月8日19時06分発行